

を教化の具たらしめ、何等格段の素養なかりきといへども、常に學者と往來して己が修養に資し、更にルツテルが聖書を體讀して、偏に時代と、步調を共にしたり。されば彼は市民生活を根柢として宗教を以て之を教化し、『フマニスム』を以て之を美化し、渾圓たる獨逸市民詩人の好典型となれり。一代抒情詩の名匠として當時の師表と仰がれしのみならず、後のゲエテ其他の天才に寄與せるもの頗る多く、戯曲家としては宗教劇の枯淡怪異を破り、俗劇の粗野卑陋を改めて、快活にして雅致ある國民劇と爲せり。性格の描寫自在にして、深刻情操強烈にして、語句流麗、其四百回生誕祭に彼が作劇を興演せる時も猶ほ熱心なる觀客の同情を得たりき。

其四 ヨオハン、フィッシャアルト

宗教革命の黄金時代は十六世紀の前半なりき。其後半に至りては、改革派はルツテル派及カルヴン派の二派を生じ、兄弟離に閩ぐの醜體を演ずるや、之を機として舊教派は忽ち頭を擡げ、『エスエート』派と相應じて反革命の運動を開始し、紛争混戦、愛國心は頓に減んで唯同黨伐異の弊に陥り、精神界は支離滅裂して歸

フィッシャアルト

着する所を識らざりき。此時若し詩才ありて詞壇に立たむとせば、勢ひ其紛亂渦中に足を投せざるを得ず。該博の修養と高大なる天才を有せるフィッシャアルトは、斯くの如くして亦此宗旨論難の筆を揮ふに至りぬ。

ヨオハン、フィッシャアルト(一五五〇——一五九〇)はマインツに生れ、法律を學びて辯護士となり、後判官たり。カルヴン派の戦士として烈しく、『エスエート』等の反革命派を攻撃し、熱心なる愛國心を發揮するに或は嚴正なる文章を以てし、或は滑稽洒落の詩歌を以てし、力て民俗の向背を指導し、警醒せり。『四本角の小帽子』、『調寶の祖母』(Aller Praktik Grossmutter)等は『エスエート』派を諷刺せるもの、佛蘭西のラベレエに材料を藉りたる『もちり物語』(Geschichtsklitterung)は同じ目的を以て有ゆる不徳痴愚の所業を嘲りしもの也。少しく宗教的論難を遠かりたるものには、滑稽なる『哲理的夫妻訓育書』、『蚤と女との訴訟』(Flohitz Weibertutz)眞面目なる物語『ツェウリッヒの幸福なる船』等あり。フィッシャアルトは時としては語呂合、輕口風の無趣味に陥れる所なきにあらねど、多く輕妙好謔巧みに人の頤を解くの機才を有し、而も其沈痛深大の感情を藏して、さすがに民族の特性を失はざ

りしを見る。

其五 散文界概観

稗史小説亦十六世紀に入りて讀者の範圍擴張せられたるより、續々として公刊せられたり。一五六年以來かの以太利亞佛蘭西等に専ら流行したる騎士小説『アマデイス』亦輸入せられ改作せられ續刊せられたり。此他外國種のものには英人フォルチュナット父子の『國民書』、『オクタヴィアス帝』、『ハイモンの子等』あり。皆佛蘭西より反譯したるもの也。獨逸の創作としては『博士ファウスト』物語(二五八七)、『シルトビュルゲル』乃至エルザスの人エルク・ギックラムの『黄金絲』等あり。

學者界亦二三の通俗的地理歴史書を出せり。セバステイアン・フランク(一五〇〇——一五四五)の『世界の書』及び『年代記』、エギディウス・チエデイ(一五〇五——一七七二)の『瑞西年代記』、ヨハンテス・ナグロコラ(一四九二——一五六六)の『格言集』等。是れ學者と民衆とが漸く接近し來れる證左にして國民文學發達上頗る良好の現象なりき。然れどもやがて起れる三十年戦争の慘劇は再び之が調和を

ギックラム  
フランク  
チエデイ  
ナグロコラ

破壊し、暫く文壇の進路を杜絶するに至りき。

第四節 佛蘭西文學

文藝復興と宗教革命とは佛蘭西にも深大の影響を與へ、其の國民文學の誘起と獨立とに貢献せり。當代の王フランソア一世の下に佛蘭西王國は常に戦勝の光榮を荷ひ、國光益々輝けるに加へて、王は頗る文藝の趣味深かりしを以て、以太利亞、フマニストを介して科學文藝は盛に輸入せられ研究せられ、以太利新興文學美術も亦歡迎せられたり。之と同時に獨逸に於ける宗教改革の運動も波及し來り、佛國民の信仰は二派に分れ、互に反目軋したりきといへども、國王は教會派に與みして之を聲援せるを以て、獨逸に於けるが如く改革派は全般の勝利を占むること能はざりき。然れども改革派の首領たるジャン・カルヴン(カルヴン一五〇九——一五六四)の勢力亦決して侮るべからず、フマニストと提携して新派學校教育に力を盡し、且つ彼は幾多の激越なる告文書簡を公にして、佛國文學家に對して甚深の刺撃を與へ、獨逸に對するルツテルに尋いで、文學史上の地位を占めたり。

マルガレイト・  
ドゥ・ゾロア

此新舊文學の境界の先頭に立てる者は婦人なりき。フランソア一世の妹にしてナブル王アンソイ・ダブルエの妻、名をマルガレイト・ドゥ・ゾロア(一四九二—一五四九)といふ。幼より「フマニスト」の教育を受け、希臘羅典を初め、伯希來語にさへ通じ、従つて其信仰は改革派に屬したり。其小説集「レブタメロン」(一名、幸ある戀人の物語)は佛蘭西文學史上近世的寫實主義を以て其劈頭を飾れるもの、蓋し「ポッカチヨ」「デカメロオチ」に倣へる也。輕快優雅、早く已に佛蘭西風の貴族的艷麗主義を現はせるを見る。唯、莊重深高の體なく、性格の活動亦薄弱なるを免れず。新以太利亞文學に學んで、而も猛烈にして露骨なる情熱主義に服従せざりしを異となすべし。

此宮室女詩人を先頭として、王城巴里なる文藝の園に集れるもの頗る多かりしが、何れも皆宮廷詩人にして、王侯の愛顧愈深きに從ひ、民衆に遠かるゝ益々甚しく、空しく古文學を尊重して、之を善用して國民的新旗幟を翻へさむとするもの無かりき。是れ獨英に於ける傾向と著しく相異する點にして、爾來謂ゆる「古典派」が殆んど三世紀間佛の文壇を占領したりき。

マロオ

クレマン・マロオ(一四九五—一五四四)も亦此派の宮廷詩人也。彼はフランソア一世の侍従にして、宗教歌を以て名あり。彼は多く改革派に同情を寄せたるの故を以て流竄の悲運にさへ會しき。聖歌以外に、若干の短詩あり。巧みに民謡の聲調を按排して、清新流麗の跡を得、以て新佛蘭西抒情詩人の祖たるの名譽を負へり。然れども當代最も傑作とせるは、

フランソ

フランソア・ラ・ベネ(一四八三—一五五三)也。シノンの一旅店の倅なり也。

兩親は彼を僧にせんとてフランソア・カ派の寺院に入れしが、彼は僧侶たるを厭ひ、閑を得ては古文學の研究に耽りぬ。爲めに同僚の忌む所となり、轉じて「ベテダイクト」派に入り、説教師として、幾多の學者と交り、改革派のカルヴンとも相識るに至れり。後モンペリエの高等學校に入りて醫學を修め、卒業して學士の稱號を得、亦講座に立てり。一五三二年初めてリオンに於て其有名の小説「ガルガンチュア」の一部を著して喝采を博し、爾來以佛の間に往來しつゝ、述作に従事し、巴里に死せり。瀕死の枕頭猶ほ諧謔の語を放つて好笑しきと傳ふ。其性格の一般を推するに足らむ。

ラベレエの名をして不朽に傳へしむるものは、其長編の滑稽小説『巨人ガルガンテアと其子パンタガリュエとの事蹟及説話』也。分ちて五巻とし、第一巻には上古ケルト族の傳説巨人ガルガンテアの奇談を叙し、第二巻以後は其子パンタガリュエの少年時代よりの生涯を描けり。材料已に冒險的奇蹟に充滿せるを以て、之を近世文學に比すれば、頗る夸大怪異の感なくんばあらず。然れどもこは單に包裝に過ぎずして、一たび之を剝脱すれば、到る處近世思潮の深烈なる情緒の感想に會せざるなし。彼は滑稽洒落の筆を以て自在に巨人父子を活躍せしめ、或は一種懷疑の弊を揚げて教會の腐敗非行を諷刺し、或は亦カルヴン一派が狂熱的信仰を嘲罵せり。蓋しラベレエは此點に於て新舊兩派の何れに屬せず、冷然宗教以外に超然たりし佛國市民一派の好箇の代表者と謂ふべし。

詩歌小説以外、一般散文界亦頗る隆盛を來せり。十六世紀中葉には謂ゆる『佛蘭西の七星』(La Pléiade Française)の一派起れり。其主張とする所は、希臘羅典文學の摸倣と以太利亞西班牙文學の齟齬とを以て新佛蘭西文學を起さむとするに在り。蓋し文藝復興を善用せむとせるものにして、之が爲に彼等は俗語を活用

佛國七星

ロンサアル

し、實際生活と人間性情の精密なる觀察を期したるを以て、其評論は多大の注意を惹けり。多くは古語の濫用と古文學摸倣とに陥らざるは、彫句琢章を事とせるのみ、亦特に稱すべき述作を出さざりき。此派に屬するものは、ピエル・ドゥ・ロンサアル、(一五二四——一五八五)、ジョアキム・デュ・ベレエ(一五二四——一五六〇)、エティアンヌ・ジョデル(一五二二——七三)、ジャン・ドゥ・ラ・タイユ(一六〇八死)、サルリュスト・デュバルタア(一五四四——九〇)等にして、就中首領として最も有名なるものを、ロンサアルとす。オギディウスに倣へる『戀人』、『ギルギリッスに學べる』、『ランシアード』等の詩歌あれども、其主張たる古典精神も、人生の活寫も、見るに能はずして、單に外形の絢爛と希臘諸神の輸入とを特徴とせるのみ。而も如何に時代の好尚に投じたりけむ、彼は『藝術の鏡』(Le miroir de l'art)なる稱を有しき。

此派が技巧の美を競つて晦澁に流れ、無味乾燥の弊に座せるを難じ、雄健なる評論の筆を揮つて、自然に倣ふべきを唱道し、明瞭直截なるべきを説けるは、フランス・ドゥ・マレ・エルブ(一五五五——一六二八)とす。其詩學は斯界の一大典型として十九世紀の後までも長き感化を與へたり。

マレエルブ

モンテエヌ

然れども此等評論家中最も重要なものをミケル・モンテエヌ(一五三三—九二)とす。マレエルブが詩學乃至美學上に其名を成せるに對して、此れは寧ろ哲學乃至倫理上重要な地位を占む。深遠なる學識と縦横の才筆とは其論文集(Les Essais de Messire Michel seigneur de Montaigne, 1580)に煥發して陸離たる光彩を放てり。貴族の家に生れたれども、都會の浮華なる生活を厭ひ、獨り隱退して冷眼以て世に對し、その精透なる觀察と明確なる判斷力とを以て、人世と文學とを解剖し指導せんとせるもの、何等情熱の人を動かすもの無しと言へども、亦一代の文豪たるを失はず。「我れ何をか識らむや」の彼が一語の正に宗教的神に對する懷疑の聲にして、後の物質主義の前程として、爾後の文壇の一傾向となれりき。モンテエヌ及びマレエブの感化の下に瞭明真率の筆致を以て名を成せるはオーゼル・アミオー(一五一三—九三)にして、其譯「プルトアルロスが偉人傳」に於て翻譯以上の手腕を示したり。

第五節 西班牙文學

西班牙文學は十六世紀に至つて初めて近世思潮と交渉するを得たり。蓋し

西班牙の發展

是れピレニエ半島の一隅に介在せると、其獨特の中世史とは西班牙人に早く著しき國民的特質を賦與し、獨佛の如く普遍性を有せしめざりしを以て也。然れどもカスティリア、アラゴン兩國の併合し、全然グラナダなる亞刺比民族を驅逐せるや、茲に西班牙は忽ち面目を改めたり。專制王國の樹立と共に忽ち中世の封建制度を棄て、外はアメリカの發見となり、續いてトランスアトランティック海の攻略となり、一五一九年には西班牙王カ、ル五世は宏大なる世界王國の君主となり、更に以太利亞諸領を侵略すると共に、以太利亞新文明に影響せられたり。此等幾多の事情は十六世紀の初に於て西班牙をして新時代の運動に參與せしむるの源因となれり。隨て「フマニスム」及び宗教革命も甚深なる印象を與へたるは亦勿論なり。又曾ては西班牙に學ぶ所ありし以太利亞新詩歌は、今や却つて西班牙詩人が採つて以て其藥籠中のものとしたり。斯くの如くして諸方面に起れる新運動は西班牙精神に一生面を拓き、當代國民文學の一大特徴たる活快なる樂天的自然を惹興せしめたり。而して此派の詩人文士は單に學校的教育を有したるに止らず、一面實際社會に活動せる人士なりし也。

又新文學の發展と共に其用語はカステリア語を以て標準とするに至れり。是れ蓋し中世よりして已にカステリアは文學の中心なりしが故に、最も能く開拓せられたりしが爲なり。

其一 以太利派の抒情詩人

新運動の先驅は以太利詩形に則れる抒情詩人なり。其第一人をフアン・ボスカン(アルモガバル、一五四〇死)といひ、主としてペトラルカに倣ひたれども、亦必ずしも自國の嚴肅なる面目を失はず、其比喻詩「オッタブリマ」を傑作とす。此他オイリビデ、エス及羅典詩人の翻譯等あり。ガルシアス・ラアソ・デ・ラ・エガ(一五〇三—一三六)の清婉多恨の詩はボスカンに優れる天才なりしを示す。カ、ル王の近侍たりしが、プレフツス附近の城塞に於て佛軍の爲に戦死せり。殊に其短歌及び牧歌「アルカディア」最も世の愛誦する所。

然れども詩壇最も盛名ありしはフルナンド・デ・ヘルレラ(一五九七死)及ルイス・ボンセ・デ・レオン(一五二八—一九二)の二人とす。共に古文學派を代表するものにして、ヘルレラは宗教的情緒の深烈を以て特色とし、レバントの戦勝「葡萄牙

ボスカン

エガ

ヘルレラ

レオン

のセバシティアン王の陣歿を讚美し追吊せる頌歌の如き、激越沈痛を、るに聖書の哀歌詩人を偲ばしむ。レオンは大學教授にして舊派の僧侶なりしが、その希臘精神を鼓吹せる頌歌と舊譯聖書の「雅歌」の翻譯とは異教徒の嫌疑を蒙る原因となりて、宗教裁判所の爲に五年の禁錮の刑に處せられき。彼が詩風の特徴は以太利亞的技巧と形式とに非ずして、自國の民謠に素朴の體を得たりし一事とす。

其二 メンドオザの小説

斯の如く抒情詩人の多くが以太利亞詩形の摸倣に汲々たりし時、超然として獨り純たる自國文學の創作に成功したる詩人あり。カルル五世朝の戦士として兼ねて外交官として有名なるドン・ディエゴ・シルタド・オ・デ・メンド・オザ(一五〇三—一七五)即ち是れ也。年少彼も亦以太利亞風の抒情詩を以て知られしが、一五五四年獨創の小説「ラザル・ロ・デ・トルメスの生涯」を以て、西班牙文學を獨立せしめたり。こは謂ゆる「奸徒小説」(Picaresca-Roman)の祖にして、奸計に長じたるラザル・ロが有ゆる人間の弱點を利用して巧みに奇計を施す様を描けり。一篇貫通せる道念固より薄弱たるを免れずといへども、其寫實の筆致の銳利にして

メンドオザ

奸徒小説

深刻なるかの敗腐せる教會派の僧侶が赦免狀賣却の光景の如きは、爲めに宗教裁判所の忌諱に觸れて、再版以後には其一段を除却せしめられきと傳ふ。

アレイン  
ペレツ

メンドーザ以後、奸徒小説頻りに流行したるが、遂に出藍の譽あるもの無かりき。マテオ・アレマン(一六一〇)の『奸徒グツヅマン・デア・レフ・ラケの生涯及び事蹟』及びアンドレア・ペレツの『悪女フスティナ』稍々稱するに足るのみ。

其三 エルシルラの叙事詩

十六世紀の西班牙歴史が顯著なる事蹟に富める一事は確かに叙事詩發達の一因たりしならむ。斯界亦頗る詩人を輩出し、カ、ル五世以後の世界的國の事蹟、コルテツ、ピザルロの冒險談、乃至ドン・ファン・ダウストリアのレバントオに於ける戰勝等皆其材料になれりといへども、昔日の『シッド物語』の素朴簡潔の風は遺却せられ、多く以太利亞の(主としてアリオストオ及びタッソオの)外形の支配に甘んじ、群詩の出づること、彗星も管ならざりしかども、傑出せしものは唯アルフォンソ・オ・デ・エルシルラの英雄詩『アラウカラ』ありしのみ。

エルシルラ  
クニガ

エルシルラ・ライ・クニガ(一五三三—九五)はマドリッドの人、智利のアラウコ

族を討たむが爲めに遠征せる西班牙軍に従ひしが、其戰爭を緯とし幾多悲壯幽婉の逸話を經として、已に戰陣の間に此れに筆を染め、歸來完成したるもの、即ち『アラウカラ』也。往々にして年代記風の無趣味に陥らむとし、事件の錯綜は統一を缺かむとするの恨みなきに非ざれども、其他は到る處生氣躍動確かに一大雄篇たり。

センプロン

其他『コロレア』の作者ヒエロニモ・センプロン、『コルテツ』の作者がプリエル・ラ・ノー・デ・ラ・エガ、『アルゲンティナ』を出せるマルティン・デル・バルコオ等あれども、エルシルラに較ぶれば、其及ばざること頗る遠しとす。

其四 戯曲及びセルヴァンテス

西班牙新文學の發展は戯曲を以て其絶巔に達したり。其初めは他國と等しく宗教劇にして、時と共に次第に喜劇的要素を加へ來り、十六世紀の初より、遂に全く僧侶の手を離れて獨立し、俳優を業とするもの亦盛に現れたり。

新劇作者の第一人はファン・エンシナ(一四五八—一五三四)といひ、通じて十種の作あり。彼れ猶ほ其戯曲を呼んで「レブレセンタシオンチ」と言へれど、其

エンシナ

ギンセンテ

ナハルロ

ロオハ

五種純たる非宗教劇にして多くは滑稽趣味を有し極はめて單純なるもの也。葡萄牙人ギル・ギンセンテ(一五五七死)のカステリア語を以てせる狂言に至つて脚色漸く複雑となり、牧師トルレス・ナハルロ(一五六〇頃死)の作は殆ど完全なる近世喜劇の形式を有し、殊に諷刺劇を創成して、かの「奸徒小説」と共に後の流行を招けり。十六世紀文學の特徴たる深刻なる寫實を以て成功せる者はセギルラの飾職たりしロオ・ペ・デルエダ(一五六七死)也。彼が演劇癖は遂に身を旅役者の群に投せしめ、成功して之が座長となり、兼ねて作家として西班牙劇を完成せり。彼が長編の喜劇乃至狂言はさまで重要な價値なけれども、其大劇の中幕として演せらるゝ一幕物の滑稽を主とせる幾編の「<sup>ヒ</sup>」は下層社會を活寫して機才縦横稀れに見るの筆にして、其人物は長く西班牙劇裡の好模範となれり。

其他幾多の群詩人が西班牙梨園に其技を競へりしが、等しく其一人として西班牙詩界の明星と輝き、同時に世界文學史上屈指の大天才として現せる者をミゲル・セルボンテ・デ・サアエダ(一五四七—一六一六)とす。然れどもセルボンテスとして千古不滅の名を成さしめたるは、其戯曲にあらずして、長編小説「ドン・

セルボンテス

キホオテ」也。セルボンテスが内部生命乃至外部生活は共に當代の深大なる思潮と西班牙の大活動とを標示する一大紀念塔にして、其投射せる影像は即ち「ドン・キホオテ」の雄篇となりて現はれたり。西班牙の「オディッセ」<sup>と</sup>稱せらるゝ此大小説の結構雄大にして變化無限なるは、やがて作者の閱歷の豊富なるを示す所以なるが、恐らく世界の詩人中セルボンテスほどに變化ある生涯を有するものあらじ。其詳細を説かむは到底此小冊子の不可能とする所なれば、吾人は單に特に重要な一二點を記して止まむ。

セルボンテスは一五四七年十月九日生る。アルカラ・デ・ヘナレスの貧しき古名家の子なり。新に設立せられたる大學に於て教育を受け、廿四歳には軍人としてレバントオの戦争に土其古人と激戦して負傷し左腕を失へり。癒えて後メシナより祖國に歸らむとする航海中、一海賊船の捕ふる所となり、爾來五年間奴隸の苦役を忍ばざる可らざるに至りしが、幾度か逃走を企て、他の同胞をも救はむの義侠より幾度か失敗したれども屈せずして徐に機會を窺ひ、遂に一僧の爲に救はるゝを得たり。一五八一年より三年間貧苦の爲に再び軍籍に身を



投じて葡萄牙と戦ひ、一五八三年に任を辭せり。爾來文壇に立ちて戯曲に小説に多數の傑作を出して文名噴々たりといへども、遂に貧苦の境を脱する能はず、一六一六年四月二十三日、彼が唯一の好敵手たりしシェイクスピアと日を同じうして永眠せり。

セルヴンテスの作頗る多し。今其傑出せるものを擧ぐれば『ドン・キホオテ』の外、牧人小説『ガラテア』最後の作なる『ベルシレスとシギスムンダ』及び幾編の『短篇小説』戯曲には『ムマンシア』及び『中幕物の五六種等なり』。『顯微なる公子マスカのドン・キホオテ』は其白眉にして亦最初の作、一六〇五年初てマドリッドにて出版せられたり。こは當時猶ほ盛に流行せる中世の遺物なる荒唐無稽の騎士小説と其愛讀者とに對する諷刺譏笑を主としたるもの、一面より見れば近世寫實主義を以て舊思想を攻撃し、以て大勢の歸趨を指導せるもの也。悲劇的喜劇風の主人公ドン・キホオテが騎士小説の冒險熱に浮されし餘り、自ら其大事偉蹟を成熟したさに、已に業に近世思潮の横溢せる世界に飛出し、強ひて頻りに中世式冒險事業を探し廻り、到る處につまらぬ事件に逢ふの滑稽を演ずといふが趣向なり。

「ドン・キホオテ」

心理的解剖深刻にして、幻想亦甚だ豊麗、之を諧謔洒落の筆に行りて、無限の趣味を湛へたり。而も獨り一讀哄然として大笑せしむるの機才あるのみならず、楮裏亦作者が謙嚴清廉の面影隠見して、自ら衿を正さしむるもの有り。其第一巻一たび出づるや、忽ち非常の喝采を博し、作者はやがて第二巻を公にするに至れり（一六一五）。他の諸國亦争つて之を翻譯し、今猶ほ永く愛讀者を有す。

第六節 英吉利文學

ピレニイ半島が歐洲大陸に對して特殊の飛躍を成せるが如く、英國の精神界は亦獨特の發展を遂げて十六世紀に偉大なる光彩を放てり。かの二大潮流宗教革命及文藝復興も亦烈しく此島國に漲りて、甚深なる印象を與へたるは勿論なり。殊に前世紀已に自國に萌し、宗教革命が茲に再びアングロサクソンの心奥に響きては特殊の聲音を發して、其文學に異彩を有せしめたり。英王ヘンリー三世は佛王フランソア一世と等しく國民的君主として尊敬せらるゝと共に亦頗る文藝を愛して之が奨励に力めしが、猶ほ其自尊心は獨逸宗教革命の敵となり、舊教會の友たりき。然れども早く已に自覺せる民衆は之を喜ばず、法王

の手を離れて寧ろ國王を其英國教會の主と仰がんとせり。初は力めて此傾向を壓迫したれども、大勢亦遂に動かすべからずして、エリザベス女王朝に至つては、新舊兩派を同等に遇するの止むなきに至れりき。斯の如くして法王の手を脱すると共に新舊兩派は難なく調和するを得たるを以て、十六世紀英文學の先驅はかの獨逸文學がルウテルの激越なる聖歌を以て開かれしと異り、却つて古文學者の平和なる述作に據つて現はれたり。

其一 古文學派及以太利亞派

英國に於ける「フマニスト」亦頗る多けれども、直接に國民文學に寄與する所ありしはトオマス・モオルス(Morris, or Morin)一四八〇——一五三五なり。其著「エドワド五世の歴史」に於て、已に明確なる筆致を示し、更に社會小説の祖とも見るべき「ユウトピア」高に理想的樂園を寫して名を獲たり。其他ジョン・コレット(一五一九死、非リアム・リ、イ一五二三死、ロオジャ・エシヤム(一五一五——一六八)等あり。紅白薔薇戰爭以來漸く社會上重要な勢力を得來れる英國市民は、今や餘力を外に用ひて、航海に貿易に西班牙と輸贏を争ふの大發展を試み、同時に之と提携

モオルス

以太利亞新文學の影響  
サルリイ

して美術文學科學も亦旺に惹興し、殊に文學は巨人シ・エクスピアを出し、遂に當代諸國文學を壓倒し、千古の偉名を擅にするに至れり。今此大天才を産せるエリザベス朝の黄金時代に接する前、姑く茲に其準備期を概観せむとす。

古學復興と共に伊太利新文學、殊にベトラルカの抒情詩がヘンリイ七世の宮廷に榮えたり。ヘンリイ・ホワド・サルリイ(一五一六——一四八)は古文學の感化の下に、非リギリウスの「エナイデ」を翻譯し、自から以太利亞に其國語と文學を學べる結果は、其「ソネット」にベトラルカを摸して英國に於ける以太利亞派の始祖を開けり。無押韻は彼が創成に係るものにして、永く詩壇の一形式たり。其友にして亦以太利に遊べるトオマス・ワイヤット(五〇三——一四二)トオマス・サックギルドルセト伯等亦其派に屬す。サックギルは抒情詩の外法學者ノオトンと共同して「フェルレックス」と「ホルレックス」なる悲劇を作りて古文派を代表し、イートン校の校長ニコラス・ユウダ(一五五〇頃)は同じく「テレンテ」に學んで喜劇「ラルフ・ロイスタア・ドイスタア」を出して、英國戲曲大發展の路を開けり。エリザベス女王朝に入りても猶ほ詩界は古文學派及以太利亞派の風趣を脱

ワイヤット  
サックギル  
ユウダ

シドニイ

すること能はずして、益々之を尊重せり。フィリップ・シドニイ(一五五四——一五八六)は以太利亞式ソネット詩人として『アストロフェル・エン・ステルラ』等あれども、彼の盛名は寧ろ西班牙詩人モンテマイヨルの『戀人ディアナ』を摸せる牧人小説『アルカディア』に在り。ジョン・リイ(一五五四——一六〇〇)は宮廷詩人として修飾小説『ユウフ・ウス』を出し、修辭の艶麗を標榜する謂ゆる『修飾派』の祖たり。

リ、イ

其二 スベンサア

當代最も盛名ありしをエドマンド・スベンサア(一五五三——一五九九)と爲す。ロンドンに生れてケンブリッジに學び、サア・フィリップ・シドニイの愛する所となり、やがてライセスタア伯の秘書として仕へ、遂に處女王が宮廷詩人たりき。一五七九年初めて『牧人の唇譜』と題する牧歌を著してシドニイ伯に献じ、以て其詩才を示したるが、其名を成せるは比喩的敘事詩『妖精女王』(Fairy Queen)也。全部十二歌より成り、三歌は一五九〇年にエリザベス女王に献じ、九年の後亦三歌を公にし、尙ほ二歌存すれども他は湮滅せり。一編の結構は妖精女王グロリアナ(光榮)をエリザベス女王に擬して其徳を讚美せるもの、グロリアナ人間界の十二惡徳

スベンサア

妖精女王

に對して十二人の騎士を遣し此美德の權化なる各騎士は夫れ一惡徳を退治して偉功を奏し、遂にグロリアナはアアサア王と婚するに終る。技工の婉曲と詩調の莊重、スベンサア獨創の調にして今猶ほ其名を冠せらるゝと、宮廷詩人の良方面を推揮して餘蘊なしといへども、深刻なる情緒と潑刺生動の筆致を缺けるを遺憾とす。

此他宮人にして亦軍士たり北亞米利加及西印度諸島の開拓を以て有名なるサア・ラルタア・ラレエ(一五五二——一六一八)の『世界史』、ジョン・ハルリントン(一五三四——一五八二)、ミカエル・ドライトン(一五六三——一六三一)の著作等は皆處女王朝の光榮を全からしめたるもの也。

其三 英國戲曲の發展及シ・エクスピア

英國戲曲の基を開ける『奇蹟劇』は、宗教改革當初より轉じて倫理劇(Moralities)となりて、等しく猶ほ聖書中の人物を採り來りたれども、之は善惡の諸徳の權化として演せられたり。然れども滑稽狂言(Interlude)は益々民俗の歡迎を受け、女王マリア及エリザベス女王の初期には之を禁止せむとしたれども、遂に全く絶滅

ラレエ  
ドライトン

すると能はず却つて發展して純たる國民劇となり、十六世紀中葉にはロンドンに其劇場の新設を見るに至れり。戯曲の取材も亦多方面に渡りて、常に滑稽のみを主とせずして悲壯の分子をも交へ、日常の茶事と共に冒險的奇談をも含有したれども、其初期に於ては一般に粗野誇張たるを免れず、又叙事詩的に動作至つて少かりしといへども、其二三種は已に完全に近世戯曲の面影を有したり。

ヘイワード(ジョン) (一四九七—一五七七乃至八七)はヘンリー七世及びエドワード六世時代の人、國民劇の第一の作者也。其の作は多く簡單なる中幕物所謂「インタアルウッド」にして、主として材料を「カンタベリー物語」に採り、巧みに人物をして生動せしめたり。尋いで、忽ち劇壇は時代の出來事殊に裁判事件及び冒險談を好んで演じ、同時に野卑なる喜劇を登場せしめたり。ジョン・リリーが作は此の時期を代表するものにして、ビイル及びロッヂに至つては却つて昔日の倫理劇に退步せり。此の時古學者サクガールは一悲劇「前節参照」を出して、劇壇を賑し、トオマス・キイド(一五八〇頃)現はれて「ジエロニモ」及「西班牙悲曲」等の悲劇を作り、漸く深刻正整の風を生せしが猶ほ殘酷殺伐の弊あるを免れざりき。ロバート・

キイド

ヘイワード(ジョン)

グリーン

グリーン(一五六〇—一五九二)の「オルランド・オ・フ・リオ・ソ」兄弟バコとボンゲン「アラゴンのアルフォンス」等に至つては、偏へに場面の変化のみを喜んで、單に冒險的事實を演ずるに汲々たりし無趣味を脱して、脚色にも統一あり、心理的解剖も深刻に、性格亦複雑となれるを見る。如上漸次の發達はやがて英國が膨張の經過を反映し來れるもの、千五百八九十頃に至つて全英國文學は無上の旺盛を極めたり。而して古今獨歩の大天才シェクスピアを以て其絶頂に達したるが、其先驅たりし幾多の戯曲詩人中最も頭角を露はし、ものをマアロオヴとす。

マアロオヴ

クリストフ・マアロオヴ(一五六三又は六四—一五九三)はカンダベリーの人、貪しき靴工の子なり。人の情により僧侶たらんとして學問せるが、情熱猛烈にして磊落不羈の天資その職に適せず、俳優となれり。然れども不幸にして舞臺を去り、當時糊口の道としては最も不適當なる作者として脚本に筆を執らざるべからざるに至れり。年齢やうやく三十歳、戀敵の爲に傷けられて死せり。其處女作は一五八六年に成れる「タンバアレエン大王」「タアメルラン大王」として

歐洲の中央に東洋人の大王國を樹てたるタンバアレン王を描きて大喝采を博したり。此作はシェクスピアが『タイタス・アンドロメカス』に多大の影響を與へたものなるが、マアロオヅは是れに於て初めて英國戯曲に無抑歌句の一體を用ふるの備を作り、偏へに韻脚の末技に汲々たりし弊を救ひ、而も激越なる悲劇的情緒を遺憾なく推揮したるのみならず、粗野散漫なりし脚色を一段の進境に導きたり。第二の作は當時恰も獨逸に出でたる同名の民謠に倣へる『博士フュウストの生死の悲劇』にして、後のゲエテが雄篇と出所を同うす。此第二作の舞臺に於ける効果は處女作に優ると數等なりき。其他シェクスピアが『エニス商人』のシャイロククの模型となれる『アルタの猶太富豪の悲劇』、『エドワアド二世』等の作あり。殊に後者は筆力の遒勁、結構の巧妙、殆んどシェクスピアの壘を摩せむとするものあり。

然れども吾人一たび大星シェクスピアに接するや、此等の群星忽然として、光を收めたるの感なくんば非ず。獨り彼が天才は英國文學の光榮とする所なるのみならず、全世界の等しく仰見る所の一大光明なり。管に劇詩人として古

シェクスピア

今獨歩の概あるのみならず、抒情叙事の二方面に於ても亦無上の詩才を發揚したり。時代を寫して遙かに時代に超越し、一人を描いて萬人を感動せしむ。是を以て彼が大才は同代自國民の十分に認むる所とならず、却つて二百歳の後初めて異邦有識の尊崇する所となれりき。其の斯の如く重大なる意義を有するシェクスピアは我邦の巢林子と等しく其生涯太だ詳ならず。シェクスピア研究歐洲各地に勃興してより、茲に百五十年、幾多の學徒幾多の説議を悉くしたりといへども、多くは揣摩臆測にして、悉く信するに足らず、其甚しきはシェクスピアなるものゝ存在をさへ否定せむとするものさへあり。然れども詩人の生命は其作物に在り。作物滅びざる限りは詩人の生命は亡ぶべくもあらず。其のシェクスピアの名の眞たるを偽たると、焉ぞ其作の輕重に關せん。是等百端の異説を容れて悠々たる、むしろ彼が偉大を證するものならずや。

ウリアム・シェクスピアは一五六四年四月二十三日ストラトフォードに生るとせらる。父なるジョンは商人なりきとも又手袋匠なりきとも言ふ。其教育に就いては殆んど明ならず、唯拉典學校に入れる跡あるを推すべし。一五八二年

漸く十八歳已れより年長のアンナ・ハザエイを娶りて妻とし二女一男を生む。一五八六年若くは其翌年シエクスピアはロンドンに移りて劇場に關係し、一五八九年には當時ロンドンの最大劇場たりしブラックフライアールス座の座員となれり。俳優にして兼ねて作者たりしが、忽ちにして成功したり。彼はマアロオヴ、グリーン等の果敢なき運命の因て來る所を察し、彼等詩才の早くも窮れるは放逸なる情熱の致す所として、常に都會の淫逸なる社交の波に乗じつゝも、尙之に溺惑せず、絶えず有識者と接觸して向上の念を養へり。當時の彼が名譽と幸福とは到底彼が天才の偉大に協はざりきといへども、而も晩年は故郷ストラトフォードに隠退して富裕なる生活を樂しみきといふ。一六一六年生れたる時と月日を同して(四月二十三日)其處に永眠せり。彼が生前其作の印刷に附せられたるは僅かに十八種に過ぎず、其全集は死後七年(一六二三)にして初めて老友ヘミンデ及びコンデルの二俳優に依つて公にせられたり。

シエクスピアは最も圓滿なる藝術家なりき。彼は藝術家として具有すべき有ゆる特性を兼備したり。雄大豊麗なる幻想と深厚普遍の感性を有し、幽婉

なる情緒と縦横なる機智とを備へ、世情人心を觀するの眼最も銳利にして、社會活劇場裏に幾多甘酸の經驗を賞め、世界史的大事件の影響を蒙り、祖國發展の盛時に生れて、シエクスピアは新時代の最大天才たるを得たり。而も未だ全く消滅し盡きざる中世文物の餘韻を掬み、旭日中天の勢ある新思想の氣息を呼吸し、何等煩瑣なる審美論乃至社會的制約束縛の爲に偉大なる個人性の發展を妨げらるゝことなく、シエクスピアは縦横に其天才を發揮するを得たりき。彼が道義觀は自由の爲に極端に流れず、穩健にして而も深遠なるを失はず。人間の自由、個人の意思はやがて善惡の根原也、吾人が行爲の責任者は吾人也、而も猶ほ其根原の深く吾人が性情に胚胎せるあるを忘るべからずと。彼は斯くて人間の運命を解釋して之が所因を人間の良心に求め、此意を以て常に人生の幾多の謎語に對し、之を描寫し、闡明して餘す所なく、其筆力の精透は個々の戯曲に個々の人物を活躍せしめ、常に新異色を賦與して而も常に世界的普遍性を具へしむ。彼が初期の二三の喜劇には人物には多少互に近似せる類型なきにあらざといへども、其他は悉く異彩を放つて彼が製作力の如何に自在にして深大なる

かを想はしむ。

シエクスピリアの精神は宇宙大の明鏡たり。辰羅萬象其影を宿さるものなし。眇たる各人各派哲學者倫理學者宗教家各己が主張を映せる一小部分を觀て直に之を其全幅と爲し引いて之を自家自派のものとして其光榮を誇らむとし紛々然として相争へり。恰も是れ衆盲の巨象を摩するもの彼が偉靈は唯微笑して其愚を憐まむのみ。其活寫せる事相亦無限に豊富也。有ゆる性情有ゆる境遇貴賤老弱賢愚の差なく五慾七情の別なく悉く彼が筆端に生動し社會發展の善や悪や自然状態の感化や影響や網羅し盡くして餘す所なし。而も之を行るに雄渾微妙の筆致を以てし各曲ことごとく渾然たる名玉たり。豈駭嘆すべからずや。

然れども彼亦初めより渾圓を獲たるにあらず。年と共に發展し精勵して完全なる域に入れる也。されば其初期の二三の戯曲中には之を後年のに比すれば頗る劣れるもの無きに非ず。例へば悲劇『タイタス・アンドロメカス』の如き猶ほ當時の時様なりし殺伐無殘の餘弊あるを免れず。又彼が作と稱せらるれど

準備時代の戯曲

も眞偽最も疑はしき『タイラスのペリクレス』『ヘンリー六世』の三種の如き疑ふらくは其一部は單に舊記の改作に過ぎずして殆んど創作を以て目すること能はざるもの、シエクスピリアの名を冠せしむるを寧ろ遺憾とすべし。喜劇『エロカ』の二貴人『間途の喜劇』『戀の無駄骨折』『終よきよろづ良し』等は其結構布置に於て以太利亞新小説派の影響を受たる跡著しく其對話に於てはかの『修飾派』の弊に陥れる所さへあり。以上は一五八七年頃より一五九三年頃に至る彼が準備時代の作なりとす。

シエクスピリアが大飛躍は悲壯なる戀愛悲劇『ロメオとジュリエット』を以て始まれり。此劇は一五九一年乃至九七年の間に成れるものにして詩人が青春の情緒を十分に發露して而も筆致已に圓熟の域に入れるを示せり。爾餘の諸作は其内部的所因及年代甚だ詳ならず。是を以て世は最初に現はれたる全集の分類に従ひ、史劇、悲劇、喜劇の三種に分つを常とす。中には二三の製作及興行の年代の推せらるゝもの無きにあらず、亦彼が晩年の作の如く晦澁の跡なき理由若くは抒情詩的分子に含める所以よりして、尙ほ青年時代のものとするに難か

「ロメオ・ジュリエット」

史劇

らざるものあり。例へば『エニスの商人』若くは『夏の夜の夢』の二喜劇の如き、是れ也。

英國史を材とせる史劇は主としてホオリンシッドの年代記に據れり。『リチャード三世』を除くの外、叙事詩風の最多きに過ぐるの嫌ひあり。此等は固より詩人が初めより統一を期したるに非ずして、唯彼より此に赴きたるに過ぎざれども、其取材に聯絡ありし結果は、自ら首尾貫通する所ある一群の史劇を生むに至れり。今之を史實の年代に順ひて排序すれば、『ジョン一世』『リチャード二世』『ヘンリー四世』の上下二部、『ヘンリー五世』『ヘンリー六世』の第一作及び上下二部の三部、『リチャード三世』及び『ヘンリー七世』等とす。此外羅馬史に材を採れる『コロレネナス』『ジュリアス・シーザ』『アントニウスとクレオパトラ』の四史劇あり。

悲劇

悲劇『ハムレット』『リア王』『オセロ』『マクベス』の中、『ハムレット』は中年の作、他は皆晩年の作に係り、シエクスピリアが悲劇的詩才の正に絶頂に達せし時代を代表す。『アゼンスのティモン』及び『トロイラスとクレシダ』は之に反して其悲劇

喜劇

的譏笑の筆の如何に深刻なるかを看るべく、共に悲劇的喜劇たり。圓熟時代の喜劇の大部分例へば『エニスの商人』『夏の夜の夢』『悍婦ならし』『おかしきウィンザアの女房達』からさわざ『御意の儘』『冬物語』等は其自在の機才と飄逸なる滑稽と、潑刺たる生氣との到處に瀰漫するを窺ふべし。此他悲劇たらむとして圓満なる結末に終れる『あらし』及び『シムペリン』の二中劇あり。

シエクスピリアの抒情詩

シエクスピリアは叙事抒情の二詩に於ても亦一天才たるを失はざりき。固より劇才の偉大には及ぶべくもあらざれども、其幾編の『短詩』の如きは、却つてよく詩人の個性を窺ふに便多し。劇に於ては其性質上純客觀の靈筆を揮ひ方めて自己を没却したれども、抒情詩に於ては自ら其主觀の露出せざるを得ず。『短詩』に現はれたるシエクスピリアは、自在に情熱を制御し得たる人生戦争の勝利者に非ずして、之を敵として苦闘する戰士なり。此の強烈なる情熱あるを見て、初めて吾人は彼が描ける人物の活躍するの宜なるを知る。シエクスピリア自身已にロメオが燃くが如き峻烈の情熱あり、ハムレットが意思をも亡みせむとする鬱憂の情あり、ティモンが猛烈なる人間憎惡の心をさへ有したりし也。此他長



編の『エナスとアドニス』、『リウクレシアの強奪』の二詩あり。作の年代『短詩』と共に精確ならざれども、大方青年時代のものたりとは諸家の一致して稱ふる所なり。文學的價値に於ては『短詩』に劣り、時好の影響を受けて、殊に前者は神話の叙事迂曲折して煩る煩はしく、往々にして餘りに肉感的たる蹟あると、好んで潤色せる弊あるを遺憾とすべし。然れどもさすがに天才の俤は隠くすべくもあらずして、隨處神韻縹渺の妙趣あるを見るべし。

其四 其他の劇詩人

シエクスピア以外當代幾多の劇詩人輩出したり。然れども、皆わが大天才には比すべくもあらず、心理的解剖や、性格の獨創や、かのマアロオヅにさへ劣れり。彼等は單に脚色の變化にのみ心を勞し、唯觀者の想像と記憶とに訴へて僅かに喝采を買はむとせるのみ、多くは未成品たる觀ありて、圓滿なる美術品とは看るべからず。此等の劇詩人及シエクスピアの後繼者たりし中に、稍々有名なるはトオマス・ヘエウッド(一六四八死)也。自ら稱して二十二編の劇を作れりといへり。然れども其一部は他の改作なり。其作中秀れたるは『親切の爲に殺さ

ヘエウッド

シヤップマン

ウエプスタア

デッカア

る、女』、『ザッポルクの公主』、『英國の旅人』等也。シヤップマンは其劇よりも寧ろホメロスを初めて英語に譯したる功を多しとすべきのみ。ジョン・ウエプスタア(一六二〇頃死)亦一劇才なりき。トオマス・デッカアと共に喜劇『西へ、ほう』、『東へ、ほう』の二編を作りて好評を博し、自作にてはシエクスピア前期に流行せる慘酷劇を復活して、『サアトオマス・ワイヤット』、『マルフの公主』、『白魔』等の悲劇を出して、久しく聲名を稱せられたり。

フレッチャア  
ポオマント

シエクスピアの後を受けて最も成功せるものをジン・フレッチャア(一五七九—一六二六)及びフランシス・ポオマント(一五八四—一六一六)とす。此二詩人は常に共同して作劇の筆を執り、主としてポオマントが趣向を立て、フレッチャア之が對話を作れり。フレッチャアは一僧正の子にしてオックスフォード大學及びロンドンに學び、ポオマントは裁判官の子にしてケンブリッジ大學に學び、一六〇五年頃より相提携するに至れる也。フレッチャアは其友の死後他の助を籍りて猶ほ執筆せり。彼等の典型とせるは主としてシエクスピアなりしかども、西班牙及希臘文學の影響亦尠しとせず。殊に悲劇に於ける慘憺たる幕は西班牙

牙の感化に基くもの也。然れども用筆性格に於てこそシェクスピアに及ばざれども、其結構布置に至つては往々彼に優らむとすものあり。其傑作とすべきは、悲劇に於ては『少女の悲劇』『ブレンチニアン』『ノルマンデイ公ロロ』等、喜劇に於ては『佛蘭西の小辯護士』『重婚』『西班牙牧師』等にして、最後のはフレッチャア一人の作也。

第七節 スラヴ文學

スラヴ民族は他のゲルマン民族に比すれば其文明の域に入る頗る遅く、中世多少の民謡ありしのみ、爾來殆んど稱するに足るべき文學あること無し。殊にスラヴ文明の精華なる露西亞文學に至つては漸く十八世紀に至つて、啓發せられたり。されば十五六世紀に於けるスラヴ文學は、今は唯山河空しく亡國の紀念を留めたるポオランド及びボヘミア(當時のチェヒア)の文學あるのみ。

此兩國文學も亦フマニストの運動を因とし宗教革命を縁として勃興せるものにして、ポオランドに於て一四〇〇年クラカウに大學設立せられて先づ精神的開發の端緒を開き、尋いで一五七九年ワルナ大學起るに及んで民族漸う近世

ポオランド文學

文明の光に浴するを得、西方普魯西亞に新教徒の學校起り、ポオランド貴族平民の間に普く革命思想の注入せらるゝに及んで、精神的活動は活潑となり、遂に多少の才人を出すに至れり。

ポオランド最初の詩人をヨオハン・コハノヴスキ(一五三〇—一五八四)といふ。著名なるフマニストにして、巴里及び羅馬に學び、ビダアル及びホラティウスを模倣してポオランド尙古文學派の祖たらむとせり。彼の最も名を爲したるは、哀歌にして、其女を悼める『トレニイ』集及び頌歌の翻譯有名なり。彼は多少の詩才を有しきといへども、尙古癖に妨げられて國民文學を建設するに至らざりしを遺憾とすべし。

彼が尙古主義は多大の影響を興へ、彼に尋げるものは競うてポオランド詩人たらむよりは寧ろ羅典詩人たらむと努むるの風を生せり。此等後繼者中稍々秀れたるは、スツイモン、スツイモノ、ギッチ(一六二九死)にして、主として希臘のテオクリトス及び牧歌詩人ピオン、モスコス等を模倣せり。彼に至つては獨り其形式を摸したるに止らずして、其内容をさへ探るに至れり。コハノヴスキの甥ベエ

コハノヴスキ

スツイモノギ  
ツツ

コハノヴスキ  
イ(ルエテル)

テル・コハノヴスキは以太利亞のアリオストオが『ロオラント』及びタッソが『放たれたるエルザレム』を譯して名あり。演劇亦盛に行はれたれども、戯曲の創作殆んど無く、シギスムント三世朝には羅馬、以太利乃至獨逸の脚本演せられ、ヅラディスラウ四世朝には佛蘭西劇の演せられしを見るのみ。

ホヘミア文學

ロムニッキ

ホヘミア文學も宗教革命と共に多少の發展を爲せり。ゲオルク・シトリイクは讚美歌の譯を以て知られ、ジモン・ロムニッキ(一六二二死)皇帝ルツドルフ二世朝の桂冠詩人として有名なり。斯くして漸く萌芽を發し來れるホヘミア文學もワイセルベルクの戦争以後は國歩非常の困難を極め、尋で三十年戦争の餘響は愈々究境に陥りし爲に遂に爛熳たる美花を開くこと無くして終れり。然れども十五六世紀間に神學歴史に關する著作乃至文學以太利獨逸文學の翻譯亦頗る多かりき。

## 第四章 反宗教革命時代

### 第一節 教會派の革命運動

十六世紀の中葉に於て獨逸を中心とせる宗教革命運動は絶頂に達し、やがて新派は分裂し、ルウテル派とカルヴン派と互に自家の教旨を主張して相容れず、論難紛争殆んど新信仰の據る所を失はむとするの觀を呈せり。是を機として久しく沈黙せる教會は再び頭を搖げ、此二派の間に介在して重大なる地歩を占むるに至れり。初は舊派中にも二三の有識者ありて、新舊兩派の融合を計らむと力めたれども、頑迷固陋の徒は却つて新派を撲滅せんとし、諸法王が猛烈なる運動遂に功を奏し、一方にはトリエンツに宗教會議(一五六三)を開いて排新教主義を確定し、宗教裁判處を以て改宗復歸を強制し、他方に於ては政略上西班牙政府と結んで援助せしかば、歐洲南部諸國は忽ちにして教會派の勢力範圍に入りたり。然れども此の教會の復活たるや、素ルウテルが改革の唱導と異りて、信仰内容の淨化に非ずして、單に教會が過去の勢力を回復し、法王が陋劣なる私慾を満さむとするに過ぎりき。されば彼の西班牙の狂熱僧イグナテ、ウス・ロヨラを先達とせる「エスイト」派の僧侶の如き激烈なる改宗運動に魅せられ、人心忽ち教會に歸向し、全く個性を没却して宗教に殉せむとする狂熱を惹起せりといへど

も、是れ病的信仰にして深奥の確信に非ざりしを以て、之を教會派の舊態に比すれば、眞面目の風を得たりとは言へ、多く其信者は神秘的たるに非ずんば迷信的となり、宗教の名の下に淫猥不義の行を敢へてし、毫も其非を悟らざるに至れり。此一般傾向は亦文藝をも支配せり。殊にロオマン民族の文藝は此結果として神秘的狂熱と肉慾満足とを以て特徴としたり。かの「エヌイト」派の運動は殊に此傾向を助長せしめ、彼等は教義宣傳の一手段として大學高等學校を建設して、直接に文藝に觸接し、主として羅典文學の復活に努力せしを以て、當代文學は羅典摸倣の弊に陥り、修辭の末技を以て生命とせんとするに至れり。

第二節 以太利亞文學

以太利亞は法王の所在地として、舊教國西班牙の權威を振へる所、兩者の勢力相俟つて反革命熱最も熾なりき。而して此傾向に乗じて現はれたる一大天才を

其一 タッソ(一五四四—一五九五)

とす。トルクアトオ・タッソ。叙事詩人ベルナルドオ・タッソの子也。一五四四年

タッソ

三月十一日ナポリに近きソルレントに生る。幼時彼が父は宗教裁判所の追放に逢ひ、彼は母の手に養はれ、「エヌイト」派學校に教育を受け、茲に古文學に親むと同時に、宗教的狂熱と神秘的空想とを養へり。一五六〇年轉じてパドヴァの高等學校に入りて法律を修む。蓋し詩人たりし父は當代思想の累を受けずして獨立するを得せしめむと欲せる故也。十八歳にてタッソは法學士の稱號を得たれど、天賦の才は彼れをして文藝に身を委ねしめ、一五六四年處女作「リナルドオ」なる一小叙事詩を出して好評を博し、「エヌテ侯アルフォンソ二世の弟ルイジ宰相に誡られて其侍者となり、フェルリアの華美を極めたる宮廷の人となれり。やがてアルフォンソ二世並に其姉妹ルクレジア及びレオノーレの愛顧を受け、殊にレオノーレに對する愛の幻想は詩人をして幾多の抒情詩を作らしめしが、實際の關接は無かりしとなり。斯くして一五七五年まではタッソは幸福なる生涯を送り、幾多の抒情詩以外牧人劇「アミンタ」(一五七二年)に愈聲名を揚げ、更に其最大傑作「放たれたるジェルサレム」の完成に近づきしが、此頃よりして詩人の精神は異狀を呈するに至れり。蓋し「放たれたるジェルサレム」の草稿を示したる似而

非學究に難せられて、自己の天才を疑へると、羅馬滯在中に信仰上の疑惑に逢着せると、競争者の嫉妬が君侯の信任を失はしめむとせると、其他内外諸種の源因は遂に内心の一致を破壊し、半は殆んど狂者の状態になり、常に不安と懷疑とに追跟せられ、果は君侯と其姉妹とを罵るに至りしかば、アルフォンソ侯は怒つて彼を聖アンナ寺院に幽閉せり。禁錮せらるゝこと七年間、その間出版せられたる彼が傑作は非常の喝采を以て迎へられ、諸人其天才を惜しむの餘りアルフォンソ侯に懇請して彼を解放せしめぬ。然れども、彼が心身共に破滅し了んぬ。爾來九年間空しく不安の間に彷徨せしが、一五九五年四月二十五日我が狂天才は其悲惨なる形骸を脱却したり。

反革命精神を代表すると共に、猶ほ文藝復興の精華をも具有したるタッソは抒情詩に於ても亦同時の大才たりきといへども、彼が詩名は主として叙事詩に在り。彼は勇士譚を謳歌するに眞實の史話と怪奇なる幻想とを綜合し、而も明晰なる藝術的理性は之が統一を失はず、秩序あり、波瀾あり、轉向あり、歸結あり、整然として毫末も亂れず、誠に渾圓の美玉なり。其傑作『放たれたるジェルサレム』は

叙事詩「放たれたるジェルサレム」

材を世界史に求め、第一次十字軍を舞臺とし、聖地ジェルサレムの攻略を以て結末とし、騎士氣質の理想的方面を描出するを主とし、各勇士が偉大なる事蹟を活躍せしむるに宗教的興靈の光彩を以てせり。其布置結構並びに諸人物はホメロス、非ルギリウス其他の古人に學べる所尠からず。然れどもタッソの意義は此綜合の巧妙なる點に在るに非ずして、其描ける人と情との活動に在り。就中女性の描寫最も優れたり。其愛を寫すや、其真と極とを盡くして有ゆる先人をして顔色無からしめ、其至情を歌うては遙かにポヤルドオ・アリオスト等をして瞠若たらしむ。以太利亞文學はタッソに據つて再度の飛躍を試めるもの、爾後の世紀は漸く詩才の衰へ行くを見るのみ。

其二 其他の詩人

アルフォンソ侯の宮廷に於てタッソの競争者たりし、ジラム・バッティスタ・ガリニ(一五三七—一六一二)は當代以太利亞の輕視する所たりし田園文學を鼓吹せるを以て名あり。其作『忠實なる牧人』といへる牧人劇はタッソの『アミナ』に優りて成功したるものなれども、修辭に力めたる結果は自然を失へり。ガブリエル

ガリニ

キアフレラ  
 スペロニ  
 グロートーと  
 樂歌  
 リスツチニ  
 諷刺文學  
 タッソニ  
 プラツチオニ  
 ホツカリニ

ロ・キアフレラ(一五五二——一六三七)はルツテル、カルヴン二派を攻撃せる詩を以て聞え、其他牧歌、讚歌等に於てはアナクレオン風の快樂主義を諷歌したり。スペロオネ・スペロニは詩人としてよりも批評家として名あり。其創作『ナナアチ』なる悲劇は時様に反して劇手を寫して異色を放てり。ルイジ・グロオトオはスペロオネと提携し、牧人劇『ペンテイメント・アマモロン』に於て、劇手風の悽愴と妖艶とを調和せんとし、又『魔女曲』カリストオを以て樂劇の始祖となれり。グロオトオ以後樂劇の作者頗る多かりしが、就中オックボオリ・スツチニの『ダフネオ』、『エウリディチ』、『アリアドネ』等は以太利亞劇の發展に著しき貢獻を爲せるもの也。

其三 反革命派の敵手

一動あるところ必ず反動あるを免れず。當時反革命の傾向の盛んなるに従ひ、之に反動して諷刺譏笑を擅にせる一派ありき。タッソに因りて新に生氣を放てる勇士的叙事詩を譏笑して、アレクサンドロ・タッソニ(一五六五——一六三五)は狂詩『盜まれたる桶』を作り、フランチェスコ・プラツチオニ(一五六六——一六四五)は『諸神の集會』を公にしたり。更に烈しきは直ちに政治的諷刺を試み、トロヤノオ・ボッ

ブルノオ

カリニ(一六一五死)はナポリなる西班牙の官僚の專横を嘲りて暗殺せられ、哲學者ジョルダノ・ブルノオ(一六〇〇死)は喜劇『光の振出人』を以て占星學者と迷信者とを罵倒し、其諷詩を以て貴族の衍學乃至勇士詩を嘲笑せし結果遂に羅馬にて火焙の刑に逢へり。其他ブルノオの如き厄に逢ひ、若くは禁錮せられたる詩人史家、數多ありき。

第三節 西班牙文學

羅馬法王が十六世紀末期に於ける排新派運動は前述の如く西班牙の援助によりて成功せるなり。狂熱僧ロヨラを出したる、此舊教國は反革命派が絶好の根據にして、學校教育の如きも主として、『エスイット』派僧侶の手に委ねられしかば、當代文藝の士にして此の傾向に感染せざるもの無しといふも不可なし。此世紀の初頭新舊兩大陸に跨りて絶大の發展を遂げたる西班牙も、今此末期に當つては漸く衰退の徴を呈し來りたるにも拘らず、文壇殊に戯曲界に於て著しき飛躍を爲し得たるは、一は過去の光榮の紀念の猶ほ國民をして自信の念を失はしめざりし爲なりとは言へ、一は實に此精神界の深烈なる刺戟に據れるものたら

すんばあらず。此時代の西班牙文學の精華は戯曲に在り、吾人は其諸天才に接する前、少しく抒情的詩界を瞥見せむとす。

其一 抒情詩

前期の抒情詩人ヘルレラが以太利亞及羅典詩風に私淑せし餘り、偏へに技巧を重視したりし結果、爾來一種の流行となりて、遂に「絢爛派」及び「學者派」の二派を生むに至れり。絢爛派の首領と目せられしはアルフォンソ・デ・レエデスマ（一五五二——一六二三）にして、其「精神の穎敏」の如きは、殆んど全く語呂と譬喩との行列を見るのみ。「學者派」の代表者はルイス・デ・ゴンゴラ・イ・アルゴオテ（一五六一——一六二七）にして、餘りに譬喩を重積せしめたる結果は思想晦澁にして解しがたき殆んど謎語と異ならず。戯曲家ロオベ・デ・エガは此弊を罵倒して狂詩を作り、「わが言葉を解せりや、斯くいふ己れさへ解せざるを」と言へり。此ゴンゴラ一派の弊に陥らざりし詩人中有名なるものはアナクレオンの詩風を以て聞えたるドン・エステヴン・マヌエル・デ・非ルレガス（一五九五——一六六九）並びにフランセス・コ・デ・リオハ（一六八九死）等なり。

レエデスマ  
ゴンゴラ

非ルレガス  
リオハ

其二 戯

十六世紀末葉より十七世紀に於ける西班牙戯曲は恰も英國に於けるエリザベス朝にして最も光榮ある時代なり。ロオベ及びカルデロンの二天才は正に此時代の代表者にして、曲の種類に於て特殊の發展を遂げたるは謂ゆる「コメディア」也。「コメディア」とはロオベ以後に於ける一種の戯の總稱にして、希臘以來吾人の稱し來れる「喜劇」の意にあらずして、今日の謂ゆる「中劇」とも見るべし。悲喜兩劇の要素の互に錯綜混和して其何れにも屬せず、而も渾然たる統一あるものなり。此等の戯曲の動機とする所は多く熾烈なる情熱慾念と西班牙式の名譽心との衝突なり。是を以て其性質は勢ひ貴族的となり、力めて武士的廉耻心、尊嚴、高雅等の諸性情を描き、若くは其反對性を婢僕に與へて之と對照せしむるを常とせり。舊教國の結果として其材料は往々宗教問題乃至奇蹟等に撰べるもの有りきといへども、又皆動機を茲に求めて實際の効果を收めむとしたり。亦以て當時の一般風俗を察するに足らむか。當代第一流の作家を。

其三 ロオベ・デ・エガ（一五六二——一六三五）

西班牙に於ける「コメディア」の意義

ロオベ・デ・

とす。ロオベ・フェリックス・デ・ガカルピオは西班牙新劇「コメディア」の創始者也。一五六二年十一月二十五日マドリットに生る。父も一種の詩才を有せる人、ロオベは僅に十五歳にして已に羅典文に通じ又詩を作りきといふ。其頃葡萄牙との戦争に出で、やがてアルカラ大學に學んで僧たらむとせしが果さず、廿五歳かの無敵艦隊アルマダに乗じて英國に航し、後婚せしが其妻イサベル天死せしかば、後妻アナを娶り、又某侯に仕官せり。彼が劇詩人としての光榮ある生活は此れより後にして、此時（一六一四年頃）までの著作は皆宗教詩乃至牧人小説等なりき。彼が晩年は多幸にして王侯衆庶の尊敬を受け、有ゆる此土の欣樂を擅にするを得たり。然れども此快樂の飽滿は彼をして遂に厭世的傾向を帶ばしめ、「生活は唯苦痛のみ」と言はしめ、無こそは眞の幸なれと叫ばしめ、一切の富を散んじて自ら苦行し、回教派の僧となりて敬虔なる信仰に慰安を求きといふ。一六三五年八月二十五日永眠せり。

彼が戯曲頗る多く無慮五六百種ありと稱せらる。此他彼に抒情詩小説等多數の作あり。「アルカディア」は牧人小説にして、「アンゲリカ的美」はアリオストオを

模せる詩、史詩「悲壯の王冠」は英のマリア・スチュアルト女王の運命を哀しめる歌にして、ロオベが宗教觀を看るべし。又小説「ドロテア」は青年時代の作者が戀愛を反映せしめたるもの也。彼が戯曲の取材は多方面に渉れり。歴史あり、古傳説あり、當代社會の出來事あり。羅馬帝ネロを材とせる「羅馬の大火」の如きあり、新世界の發見者たる「コロンブス」の如き冒險譚あり、乃至時代の明鏡たる「セザルラの星」の「難中の難」の如きあり。彼が人生を觀察するや極めて精透、之を描きて常に純客觀的態度を持せり。彼は此點に於て寫實派也。然れども彼が効果は荒唐不稽を常事とせし西班牙の舞臺に、近世的寫實の分子を加へたる點にあるに非ずして、寧ろ布置安排の自在にして、劇的效果をして非常の力あらしめたるに在り。唯彼が性格描寫の比較的薄弱にして、往々にして同一類型の人物現れ、又人格の深大なるもの渺きを遺憾とす。彼が劇才は悲壯的分子に於るよりも比較的喜劇的の作に成功せるが如し。其傑出せる作物中、悲劇に於ては「セザルラの星」「復讐なき罰」「喜劇に於ては「難中の難」「見ぬ戀」「マドリットの花束」「ドン・ファン」の花」等、及び彼が創始に係る謂ゆる「コメディア」にては「オカアニヤの會長」「シマン



カスの少女達』『情人の奴隸』等なり。其他五六の宗教劇あり、殆んど皆譬喩を以て傳道に盡さんとせるもの、多くは宗教上の傳説又は聖者傳等を材料とせり。此宗教劇はカルデロンに至つて其絶頂に達せり。今此一天才に接する前、姑くロオベと同時代の劇詩人を觀察せんとす。

ロオベが盛名は一世を蓋ひて、同時代亦一人の劇才無きが觀ありといへども、子細に觀じ來れば、多少の秀才無きにあらず。かのソリア寺院に長老として、ティルソオ・デ・モリナ(一五八五——一六四八)の名に匿れて約三百篇の戯曲を作れるガブリエル・テル・レッツの如き、到底ロオベの大才には及ぶべくもあらねど、亦好箇の詩才たるを失はず。其想像力の自在にして豊富なる點に於て却つてロオベに優らむとし、筆力適健にして機才亦銳利、殊に婦人を描くに長じたり。『綠色洋袴のドン・ギル』『戀の隣者』『サグラの田舎女』『ドン・ガブリエル』等は其傑作にして、就中『セギラ』の嘲弄者』は西班牙固有の「ドン・ファン」傳説を寫したるを以て名あり。後世のドン・ファンを材とせる詩は多くは之に基けり。宗教劇としては『疑惑の爲に咀はる』等二三篇あり。

モリナ

アラルコン

モントアルゾン

カルデロン

ドン・ファン・ルイ・デ・アラルコン・イ・メン・ド・オザ(一六三九死)は中央亞米利加なるメキシコのタスコに生る。當代世人の知る所とならず、却て非難せられたれども、亦一劇才たり。多恨多情にして而も亦道義觀の頗る健全なる詩人なりき。『世界の寵幸』『セゴギアの織匠』『あやしき眞』等は西班牙劇中優逸の作品たり。ファン・ベレッツ・デ・モントアルゾン(一六〇二——一六三九)はマドリットの人、ロオベの門人にして、宗教裁判處の書記生たり。一面に於て小説をも作りしが、劇詩人としては『名譽生活』『二重の復讐』等を以て有名なり。

其四 カルデロン(一六〇一——一六八一)

ドン・ペドロ・オ・カル・デ・ロン(デ・ラ・バルカ)は千六百年一月十七日マドリットに生る。ロオベと同じくカステリア人の孫にして、父は大藏省の秘書官なり。幼にして「エスイット」派の學校に教育せられ、將來舊教的詩人としての特質は已に此時代より培養せられたり。漸く十三歳早く已に喜劇を作り、二十歳懸賞戯曲に當選し、ロオベの稱讚を博したり。サラマンカの高等學校に學べる後、一六二二年より十八年間西班牙軍に入りて士官たり。時の王フィリップ四世は最も文藝の趣味深か

りし人、カルデロンは其寵幸する所となり、宮廷詩人として宮廷劇場の監督に任せられ、一六三七年には騎士の列に加へられ、一六四〇年再び軍人としてカヌタニアの謀反を征し、一六五一年かのロオベの如く加特利教の僧となり、一六八一年五月二十五日マドリットに逝けり。

カルデロンの生涯は之を西班牙の他の詩才のに比すれば静穩なりき。是蓋し彼が性格の平靜温良なりしが故なり。彼は亦敬虔なる加特利の信者なりしかども、亦之が爲に「エスイット」派の狂熱的迷信にも陥らざるを得たり。彼は劇詩人として特に異を樹てたるを無し。其の人世觀に於て、材料の撰擇に於て、將に作劇の方法に於て西班牙諸先人と殆んど其規道を一にしたり。然れども彼が圓滿なる人格と秀逸の天才とは能く先人の缺點を補ひ、以て西班牙劇をして完成せしむるを得たり。構想自在にして豊富、人物の性格を解剖するや深く、境遇を描寫するや亦精透にして、其行文に至つては殆んど西班牙語の粹を抜けるもの、先人ロオベの大名をさへ壓せむとするの光榮を博したり。カルデロンは性格描寫に於てロオベの深刻には及ばずといへども、其戯曲形式の統一に至ては

遙かにロオベに優るものあり。カルデロンの王室に對する關係はロオベに比して自由ならず、爲に彼をして貴族的たらしめ、主權の下に屈説するの已むなきに至らしめたり。又其宗教觀に於てもロオベと等しく加特利教徒たりしかども、彼は猶ほ一面に於ては自由思想家なりしを失はざりしが、カルデロンは全然思想の自由を没却して全心を信仰の秘密裡に投じ、東洋式壓世家となり、現世を以て單に彼岸の樂地に對する渡船場とせり。彼の西班牙固有の名譽を重んずるの點に於ても、ロオベに較べて更に強烈なるものあり。是れを要するにカルデロンは西班牙國民の特性を發揮せんとして凡ての點に於て誇張に失したり。若しロオベを以て寫實家と言ひ得べくんば、カルデロンは「ロマンティック」なり。偏に空想の走るに任せて、往々にして人生の真相を觀過したる跡あり。さもあれ、新時代の加特利教詩人として以太利のタンソに優れりとも劣らず、西班牙詩人としては十七世紀の文學界の全精神を代表して永く世界史上の一偉觀たり。カルデロンの最大傑作として十指の等しく指さす所のものは悲劇『サラメアの判事』也。之に尋げるを『沈毅なる王子』、『己が耻辱の畫工』、『己が名譽の醫者』、『嫉

妬は大怪物等とす。中劇にては『人生一夢』『マンティブレエの橋』『ルイス・ベレッツ』等の外、頗る樂劇風の分子多き『三大不思議』『寶物』等あり。喜劇は最も此の詩人の性格に適へり見え傑作頗る多し。就中『何にも代難き吾貴婦人』『靜かなる水に注意せよ』『ドゥウエンデ夫人』『四五月の朝』『公然の秘密』最も秀れたり。彼が宗教詩としては『十字架の崇拜』等あり。又單に教會の儀式に演せられ、主として宗義教旨を徴象したる謂ゆる『聖劇』三四曲あれども、純文學的作品としては特に擧ぐるに足るもの無し。

西班牙文學はカルデロンに因つて發展の極に達し、彼一たび逝いてより斯界頗る寂寥蕭殺の觀を呈したり。カルデロンと同代の作家にして其大才に私淑せるもの頗る多かりしが、亦一人の其師と比肩せらるべきものあらず。此等の後輩中其の比較的有名なるものを擧ぐれば。

フランシスコ・デ・ロヤス(一六〇一—一六三三年頃生存)あり。トレドオの人の詩的想像力あまりに活潑にして技巧の之を協はざるものありきといへども、亦一個の詩才たるを失はず。其傑作の清新にして氣力に富める、頗る看るに足る

ロヤス

モレトオ

ものあり。『王以外亦人あらず』『復讐の結婚』『嫉妬の名譽』等を其雄篇とす。

アグスティン・モレトオ・イ・カバニャ(一六一八—一六六八)はマドリットに生る。舊教の僧侶なり。彼が作は多く純たる創作に非ずして、他に材料を求めたるものなれども、其の之を筆にするや、其性格描寫の巧妙なる、對話の自在なる、却て原作を壓倒するの手腕ありき。其傑出せるものは『武士的判官』『依佔地境 Melusian con us deuden』美きディエゴオ等也。

#### 第四節 葡萄牙文學

葡萄牙文學の發達は頗る遅かりき。十四五世紀の交二三の騎士詩人を出せりといへども、其用語の大半は西班牙語たりしのみならず、亦殆んど獨立せる葡萄牙文學としての特質を認むること能はざりしが、十六世紀の末期に方りて、今や政治上一時獨立を失ひて西班牙の屬邦(一五八〇より一六四〇迄)たらむとせし時、一大世界的詩人を産出して不朽に其國民の光榮を傳ふるを得たり。葡萄牙語は素西班牙の一方言に過ぎざりしが、西班牙統一以後葡萄牙が航海貿易乃至發見等の大活動を試みたる結果、忽ちにして獨立せる文學語となるの氣運に

ミランダ  
フェルライラ  
ギセンテ

會せり。十六世紀初期に輩出せる詩人中、サデ・ミランダ(一四九五——一五五八)及びアントニオ・フェルライラ(一五二八——六九)は共に以太利亞の感化を受け、文藝復興の新氣息を呼吸して祖國文學の爲に道を開けるものにして、各抒情詩人として有名なり。ミランダ及び戯曲家ギル・ギセンテ(一五〇二——一五三六)は猶ほ葡萄牙語と西班牙語とを用ひたりしが、フェルライラに至つては全く獨立し、自國語を以て作詩せり。彼が抒情詩以外悲劇「イテツ・デ・カストロ」に自國歴史を材として成功したり。若し夫れフェルライラを以て文藝復興時代の代表者とせば、反宗教革命の精神を代表し、中世十字軍の情趣を復活して、世界文學に一大壯觀を現せしめたるものを、

カモイス(一五二五——一五八〇)

とす。彼は獨り葡萄牙文學史上の唯一の詩人たりしのみならず、亦世界屈指の大天才也。ルイス(ヴツ)・デ・カモイスは一五二五(又は一五二四)年コインブラに生れたり。家は名門の末なれども貧しく、父は印度航海の一船長なりき。カモイス幼より詩才あり、故郷に教育を受けたる後一五四五年リスボン宮廷に出入

カモイス

「オス・ルシア  
ダス」

し、宮女カタリナ・デア・タイデに眷戀したるが爲に追放せられ、一五五〇年印度に往けり。當時印度は葡萄牙人の活劇地たりしが、彼は追放を憤懣して諷刺詩を公にしてより再び罪を獲て支那沿岸マカオに送られたり。數年の後漸く許されて印度のゴアに歸らむとせしが、航海の途上難船して僅かに其大叙事詩「オス・ルシアダス」の原稿の外有ゆる財産を失へり。一五六九年若王セバステアンが王位に即くに及び、漸くカモイスは祖國に歸るを得、一五七一年其大叙事詩を公にしてセバステアン王に捧げ、非常の喝采を以て迎へられしかど、王朝の彼に酬ゆること甚だ薄く、僅かに我邦の三十五六圓の年金を與へたるのみ。好評の結果として順次に續編を出したれども、詩人は永く貧苦の境を脱すると能はず、遂に忠實なる一僕が夜々主公の爲に街路に米錢を乞へりてふ傳説をさへ生むに至れり。斯くして此世界的大詩人は一五八〇年六月十日一養育院に永眠せり。カモイスは抒情詩に於ても傑出せる手腕を有し、ダンテ、ダッソ、シェクスピア等と比肩して敢て遜色なし。然れども彼をして萬古不朽の名を成さしめたるものは叙事詩「オス・ルシアダス」也。素此題名は「ルスウスの子孫の義也」。「ルス

ウス』とは葡萄牙の傳説の以て自國民の始祖とする所。詩人の斯く之に題したる所以は、葡萄牙國民の勇士を描き其事蹟を讚美して祖國の光榮を發揚せむとしたるが爲也。詩人は是を以て自國の獨立と發展とを徵象せむとして偉人ヴスコ・デ・ガマの初航海を材料としたり。其間或は祖國上古史の諸傳説を交へ、希臘羅馬の神話を挿み、若くは作者の空想に産れたる戀愛譚を編み、異種多様の錦繡を織成したれども、常に航海の目的を忘れず、終始無限の寶庫たる印度に達到せむことを期し、遂に其目的を貫いて葡萄牙の國運隆然として旭日の如く發揚するを豫言するに終れり。

カモイスは其先人と等しく以太利亞文學の影響を受けたるは、其抒情詩乃至此『オスルシアダス』の明示する所なりといへども、彼が愛國の熱誠は其筆に生命を與へて、單なる模倣に陥らしめず、將た唯怪異の空想の馳るに任せず、よく之を制約して其本來の目的を貫徹し、脈絡あり波瀾ありて無限の趣味を湛へたる一大美術品を完成するを得たり。彼は斯くして世界詩人たるを得たるのみならず、葡國唯一の國民詩人として永く其全精神を代表するもの也。

第五節 佛獨英文學と反革命

十六世紀末の佛國も亦反宗教の運動頗る盛にして、教會派と新教派「ユウゲノット」との争闘甚へず、遂にかのバルトロモイス祭の慘劇を出すに至れり。されば文學亦大いに其影響を蒙り、從來漸く古文學の勢力を脱して獨立せむとする傾向を滅し、再び希臘以太利亞を典型とし、形式に於ては嚴格偏頗の美學を標準とし、内容に於ては盲目的尊王主義を以て特徴とするに至れり。而して此傾向を代表するものは、かの『佛國七星』也。此『七星』に關しては前章文藝復興の影響を論せる項に概説したれば、繁を厭ひて茲には之を省略し、唯之に屬せる詩人の名と此傾向に關係ある著作とを掲げて止まむとす。讀者冀くは之を前項(一九三頁)と對照せられむとを。「七星」の首領と仰がれしはピエル・ド・ロンサアル(一五二五—一八五)にして、其作の有名なるものは『ランランシアド』てふ史的敘事詩也。之に尋いでジョアキム・デュバルレエ(一五二四—一六〇)の『求愛詩人』エティアンヌ・ジョオドル(一五二二—一七五)の悲劇「捕へられたるクレオパトラ」等最も有名なり。此他の四詩人は曰く、ジアンドオラア・白く、アントアア・ド・バイイフ、曰く、ルミイ・ベル

ベルレエ

獨逸

バルテ

英吉利

サウスウェル

ロオ、曰く、ポントゥス・ドゥティアアル。彼等の作は抒情詩、諷刺詩乃至翻譯也。

宗教革命の源地たる獨逸に於ても亦復活せる教會の勢力猖獗を極め、エスイットはインゴルシュタット及びデルリンゲンに大學を創設するに至りきといへども、實際に於ては舊教の信徒は新派の十分の一二を有したるに過ぎざりき。斯くして文學も亦さまで重大なる影響を蒙らざりしが如けれども、一部に於ては漸く古文學的美學派と以太利亞近世文學の跋扈を見たり。然れども、此傾向を代表せる詩人に偉大なるもの無く、佛の「七星」にさへ及べるものあらず。抒情詩人にはヤアコフ・バルデ(一六〇三—一六六八)あり。宗教詩人としてはフリイドリッヒ・フォン・シベエ(一五九五—一六三五)にして、エスイットなり、アングエルウス・ジレジウスの號を用ひたるヨオハン・シッフレル(一六二四—一六七七)あり。

新派保護國を以て有名なりし英吉利にさへ此反革命熱一時光燭を放てり。之を代表する、ロバアルト・サウスウェル(一五六〇—一五七五)は「エスイット」にして、反革命派唯一の抒情詩人たり。其作多く宗教詩なれども、流麗熱烈亦誦するに足れり。

## 第五章 啓蒙時代

### 第一節 科學の勃興、文學の衰頹(十七世紀)

今や十七世紀文學を觀察せむとするに方りて、先づ吾人の注目すべきは文明の轉向なり。從來宗教を中心とせし精神界は、茲に自然科學と純正哲學とを迎へて其覇王と仰ぎしと、是れ實に十七世紀文明の一大特質なりとす。宗教革命と革命反對の運動とは三十年戰爭を開くに至りたれども、戰爭の目的は一轉して政治的利害問題となり、戰爭終結すると共に國家主上主義は無前の勢力を得て、列國悉く宗教の勢力を脱却せり。茲に法王の權威全く地に落ちて、プロテスタント亦昔日の至情を捧ぐるもの無く、世は一般に宗教に對して甚だ冷靜なる態度を執るに至れり。斯くの如くして宗教革命の餘波に乗じたる前世紀文學が漸く跡を收むると共に、新たに起れる文學は已に其生命たる熱誠と至情とを失へるを以て、其内容甚だ振はず、偏へに外形の華麗絢爛を事とせむとす。加ふるに文藝復興の一大產物として自然科學は十六世紀末より十七世紀初に亘り

ベエロン  
デカアルト

て著大なる發達を遂げ、之と相提携して哲學亦スコラ學派の舊套を脱し、英のフランシス・ベエロン(一五六一——一六二六)出で、經驗哲學を主張し、佛のデカアルト(一五九六——一六五〇)は推理派を代表し、各々宗教以外に精神界の一方に覇を稱せり。此兩哲學派の根據とする所は異れりといへども、其從來の傳説典故を抛擲し、全く自由の精神を以て眞理を闡明せむとしたるは則ち相同じく、其空想情緒を斥けて理義を重んじたる點に於ては亦相等しかりし也。已に科學と哲學と情を棄て、理を尙ぶ。情を以て生命とする文學の焉んぞ能く衰退せざるを得む。斯くの如くして情熱の燃ゆるもの無く、詩的自由の壓迫せられたる文學は、亦乾燥枯淡の談理に陥り、情想をも顧みずして唯形式を尙ぶに至りぬ。偶々前世紀の文學隆盛時代より産れ來りし二三天才の、或は駭目すべき飛躍を試みしもの無きにあらず、將た此談理主義形式主義に反抗して文學の復活を唱導し努力せるもの無きに非らざりきといへども、遂に十七世紀末に至つては謂ゆる「佛國學士院」Academie française 一派の形式主義は最後の勝利を獲、之を中心とせる佛國西文學は無上の盛觀を呈して、他の列國文學をして悉く模表と仰がし

むるに至れり。

### 第二節 以太利亞文學

十七世紀の以太利亞文學は其國民精神と共に空しく退歩の跡を印せるのみ。西班牙の暴政の下に國力漸く衰へ、道義益々頹廢して僧侶の別なく貴賤の差なく、世を擧げて淫逸に耽れり。一時天才出で復活せる教會の餘勢に乗じて以太利亞文學の爲に萬丈の光燭を揚げたりといへども、今は空しく一場の夢と化し去りて、個人的に偉大なるもの漸く希に、自在の空想は枯淡なる繩墨の制肘を蒙り、詩才あるものは唯公衆の趣味に媚びて、琢章彫句を以て自ら得たりと爲す。當代第一流の詩人たりしマリニすら、猶ほ此風を脱すること能はざりき。亦以て文壇の全豹を想見するに足らむ。

マリニ

ジாம்バッティスタ・マリニ(一五六九——一六二五)はナポリの産也。阿諛を以て巧みに貴族社會に立交り、或はサチイ侯に仕へ、又は巴里なるメデイチ家のマリア王女に従ひ、後にはナポリなる西班牙の副王にさへ媚びて、其宮廷詩人となり、華美典雅の一體を創始せり。此等の抒情詩以外に二編の叙事詩あり。一は「無辜

の「虐殺」と題して「ペトレヘムの小兒の虐殺を歌ひ、次は『アドネ』といひて、神話中なるエヌスとアドニスとが戀物語を寫し、以太利亞式淫靡の風を反映せしめ、有ゆる肉感的文字を弄して憚る所なし。此二詩共に修飾に過ぎたる結果は譬喩あまりに多くして往々にして唯空しき謎語を讀むの感あらしむ。

マニリー派の詩人頗る多し。曰く、クラウディオ・アキルリニ、曰く、ジロラモ・ブレテイ、曰く、アントニオ・ブルニ。此の他樂劇作者にはベネデット・オ・フルラリ(一六三七頃)あり。

此のマリニー派の朦朧晦澁なる形式文學に反抗せるもの亦尠からず。中には傑出せる才能を有したるものも有れども、時代精神を超越したりしを以て、さまで顯著なる効果を興へざりき。此等反對派中サルヴトオル・ロオザ(一六一五—一六七三)は畫家として亦一天才たり、詩人として即興詩、殊に「諷諧詩」を以て大膽にマリニスムスを難じたり。ギンチエンジ・オフィリカヤ(一六四二—一七〇七)はフロレンスの人、十七世紀末葉の大詩人也。國民墮落して益々柔弱となり國運日に衰ふるを慨し、熱烈の調を以て沈痛の音を放ち、マリニ派を嘲罵する

ロオザ

オフィリカヤ

と共に國民の惰眠を警醒せむとしき。

然れども水の低きに就くが如き勢を以て全文藝界を風靡したるマリニスムスは此等出世間的詩人に由つては革められずして、謂ゆる「アルカディア會」と稱せる詩人團に因つて多少の良趣味を加ふるを得たり。瑞典の女王クリスタイアーネが以太利亞殊に羅馬に滞在せるとありき(一六六〇—一六八〇)。女王は文藝の趣味深高なりし人、其保護の下に一群の詩人は宮廷に會合せり。曰く、フランチェスコ・レメネ、曰く、諷諧詩人ベネデット・オ・メンジニ、曰く、一面には自然科學者たりしフランチェスコ・レディ、曰く、アレクサンドロ・ギディ(一六五〇—一七一三)。彼等はマリニー派の弊を矯正せんと力めたりしが、其運動に加盟するもの次第に多く、遂に「アルカディア會」なるものを組織し、情緒の卒直と語句の簡明とを標榜して力めて自然を獲むとしたり。然れども由來會員の多くは學究にして天才に非ず、彼等は形式の弊のみを説いて其内容に及ばず、否、彼等已に時代の産兒たりしを以て、時代精神の支配を脱する能はず、遂に相率ゐて空しく街學的 forms 主義に陥れり。「アルカディア會」員中、インノチエンゾ・オ・フルゴニ(一六九二—一七六八)、ジ・アム

「アルカディア會」



フォルタイゲ  
ルラ

パッティスタ・ザッピ(一六六七—一七一九)、エウスタキオ・マンフレディ(一六七四—一七三八)等は其著名なるもの也。——以上の何れにも屬せざりし唯一の詩人あり。カルテロ・マコカルテロ・マコの號に識られしフォルタイゲルラ(一六七四—一七三五)にして、獨り起然として兩派の弊を脱却し、ブルチ、アリオスオ等の諸先輩に私淑し、諷刺的叙事詩『リッチアルデット・オ』二篇をものして詩名を擅にしたり。

第三節 獨逸文學

獨逸文壇は以太利亞に比して更に墮落せり。宗教の紛争とハプスブルク家の政略とは國民的自覺心を失はしめ、三十年戦争は國民をして不安に陥らしめぬ。風俗は壊敗し國語は紊亂せり。王侯争うて佛國の風を摸し、自國語を棄てて佛語を談りて得々たり。偶々愛國者ありて國語の統一を計らむとして二三の語學會『アイマアルの』『バルメンオルデル』『ハンブルグの』『ドイッチゲジントゲノッセンシャフト』『ニウルンブルクの』『ベグニッツ』起り、中には詩歌をも研究題目に加へたるものあれども、多くは語學の講究に在りしを以て、其文學上に於ける効果としては唯衍學の風を招げるのみ。民謡は次第に勢力を失ひ、偏へに外國の摸倣を

オピッツ

事として時流に媚びたるオピッツ一輩の跳梁を見るのみ。到底十七世紀の獨逸文學は唯其墮落を語るあるのみ。

其一 オピッツ及其亞流

三十年戦争の初に當りて最も聲名を博したるをマルティン・オピッツ(一五九七—一六三九)とす。シレジエンの人革命派の信徒と稱しつゝ、教會派の王侯に阿諛するを憚からず、獨逸皇帝フェルディナント二世の寵を得て桂冠詩人となり、一六二八年貴族に列せられて『フォン・ポオベルフルト』と稱せり。其著『獨逸詩學』を以て韻律字句の整正を論じ、以て一新詩風を起さむと企てたり。然れども彼は毫も國民生活の真相を顧みず、唯學究と貴族とに媚びんとせるを以て、彼は典據を獨逸謠歌に求めずして佛蘭西文藝復興の學者の述作に規れり。殊にビエル・ド・ロンサアルの詩論は最も彼の尊崇せる所斯くの如くしてオピッツは空しく自國語と自國民との頽廢に寄與したるのみ。詩人としての作物は皆此繩墨に例を與へたるもの、多くは摸倣にして温情なく眞趣なし。作の最も有名なるものは『水魔女ヘルツィイニイの牧羊』、『悲惨なる戦争の慰藉』、叙事詩『エスギウス』及び歌劇『ダフネ』

等也。『ダフネ』は獨逸に於ける最初の歌劇として名あり。

オビッツに倣へる詩人頗る多し。皆シレジエンの産なりしを以て第一シレジエン派の稱あり。彼等は師の弊所を學んで更に墮落し、單なる修辭と潤色とを以て満足するに至りぬ。フリイドリッヒ・フォン・ロオガウ(一六〇五——一六五五)はオビッツと性格を異にして大膽磊落にして愛國心に富める人、オビッツの感化を蒙れるは單に其詩調のみ。彼は得意のエピグラムを以て或は眞面目に或は諧謔を以て時代の病弊を痛罵したり。殊に獨逸の政策と、外國盲從主義と神學の爭議とを冷笑するに寸鐵腸を抉ぐる底の鬼語警句を以てしたり。——バウル・フレミング(一六〇九——一六四〇)は更にオビッツの影響の深かりしもの。ライプツヒ大學に醫學を學びしが三十年戦争の爲に祖國を去つてペルシア駐在公使の侍醫となりき。其抒情詩才の深高なる、遙かにオビッツの上に出で、當代屈指の詩人たり。——アンドレアス・グライフィウス(一六一六——一六六四)は三十年戦争の難を避けて和蘭、佛蘭西、以太利等に逃竄し、備さに戦争の痛苦を味ひ、人生の闇黒を視て哀しめり。古代悲劇詩人及和蘭戯曲家チンデルに倣ひて幾扁の劇

ロオガウ

フレミング

グライフィウス

ダフネ

をものしたり。此一派が修辭辯と術學の風とは猶ほさすがに脱するを得ざりしかども、其性格の剛健にして其の想像力の自在なる「シレジエン派」中稀に見るの才人也。其悲劇には『レオアルメニウス』、『ガタリナ・フォン・ゲオルギン』、『カルデニオ及びツェリンデ』、『カロール・シトリアドス』等あり。然れども彼が喜劇は更に秀逸なるもの也。喜劇に於てはかの術學辯を脱して眞社會の描寫を努めたり。『ペエテル・シクモット』、『ホルリビククリブリファックス』及び『戀人棘荆』は其最も著名なるもの、殊に最後の一曲はフライタアクの之を批評してレッシング以前の獨逸第一の喜劇と稱せる所のもの也。

同じくオビッツを典型とせるものに『ケイニツヒスベルク派』と稱する一群の詩人あり。三十年戦争の末期に起れる朋友の會合にして會員は詩人と音楽家と相半せり。字句の簡明素朴は其標榜にして亦往々眞情の流露したるもの尠からず。最も傑作せる詩人をシモン・ダフネ(一六〇五——一六五九)といひ、抒情詩殊に民謡を得意とせり。

其二 宗教詩

此衰微時代にありて獨り多少の光彩を放てるものは宗教詩なり。等しくオピッツの形式に随ひたれども猶ほかのルウテルの開ける軌道を歩んで、一新聲調を獲たり。内心の敬虔なる信仰が悲惨なる戦争の窮迫に會して慰藉の聲と發したるもの、其オピッツの死形をしてよく活躍せしむるを得たるは、實に深奥の至情に出でたるを以て也。ヨハンネス・ヘルマン(一六四七死、マルティン・リンカルト(一六四九死)、ヨオハン・リスト(一六六七死)等の宗教詩人中、其の最も大なりしをバウル・ゲルハルト(一六〇七——一六七六)とす。ハルレ附近グレエフェンハイニヒエンの人、ルウテル派の宣教師にしてベルリインなる聖ニコライの副僧正たりしが、ルウテル派とカルヴン派との紛争の際、政府の禁止に反してカルヴン派を難じたる爲に、ベルリインより逐放せられてザクセンに往けり。其深高なる精神を托したる數十篇の佳調は永く國民の至寶として今も猶ほ人の愛誦する所たり。

其三 反オピッツ派

オピッツ派の冗漫なる細墨主義は十七世紀の中葉に方りて遂に一種の反對運

ゲルハルト

グアイセ

ロオエンシタイン

ホフマンズワルダウ

動を惹起せり。空想は束縛を脱して自在に翱翔するを得たり。然れども憾むらくは高遠なる自然を求めずして、晦澁朦朧の弊に座せり。是れオピッツ派の佛蘭西文學に師事したる如く以太利亞のマリニを摸型としたれば也。此マリニスムスの彫章琢句と淫靡猥雜とを特色とせる一派は謂ゆる「第二シレジエン派」にして、其主なるものはホフマン・フォン・ホフマンズワルダウ(一六一七——一六七九)及びカスベエル・ラッソ・ロオエンシタイン(一六三五——一六八三)の二シレジエン人也。前者の肉感的文學と譬喩の過重せる抒情詩は殆んど人をして嘔吐を催さしめむとし、後者の銜學癖と冗漫なる潤色とは又趣味を損すること頗る甚し。ロオエンシタインは殺伐なる悲劇の外に長編小説「勇猛の軍將アルミニウス」と其高貴なる妻「トッスネルダ」を著して盛に其美學者としての誇學臭を交へ、夸大晦澁なる修飾を施して世の喝采を博したりき。

此二詩人の亞流を汲むもの頻々として輩出するや、チッタウ大學長クリスティアン・グアイゼ(一六四二——一七〇八)は憤然として、ロオエンシタイン派に反し、佛蘭西尙古風の影響の下に簡朴素明を主張して、自ら著作したりしが、其極亦粗野に

陥れり。其多數の戯曲中散文を以てせる喜劇は最も好評を博したり。諷刺小説其傑作は『全世界の三悪阿果』及び抒情詩も亦其形式の簡素を尊べるは嘉すべけれども、深遠なる詩的内容に缺けるを遺憾とす。

其四 散文界

十七世紀の大部分の韻文は一般社會と隔離して常に貴族的乃至學者的たりしに反し、散文は直ちに全國民と接觸し、大體に於て三十年戰爭中の悲惨なる國民生活の寫生に力めたり。勿論散文家の多くは諷刺譏笑の方向を執れり。其最も著名なるものをアブラハム・アザンクタククララ(一六四二——一七〇九)とす。本名をウルリッヒ・メガアルレといひ、ギインの宮廷牧師にして、其滑稽の機才に於ても亦通俗的説法に於ても遙に他に優れり。其傑作は長編『ユツダスの大驅兎』及び演説としては『起て、起て、基督教信者よ』の一編最も知られたり。殊に後者はシルレルが其『アルレンシタインの陣處』に用ひたるを以て有名となれり。

小説も亦多く過去と外國とに材料を求むるを例となしたれども、三十年戰爭終を告て國民的感情漸く喚覺し來るや、亦獨逸生活の描寫を試みたるものあり。

アブラハム

グリムメルス  
ハウゼン

十七世紀小説家中最も傑出せるものをヨハン・ヤアコブ・クリストフ・フェル・フォン・グリムメルス・ハウゼン(一六二五——一六七四)とす。ヘッセン州ゲルンハウゼンの人、十歳以來軍人として戦塵の間に馳騁し、媾和成りて後は諸方に大旅行を試みたり。彼が作中華美と荒唐とを主としたる勇士小説は早く世の忘るゝ所となりたれども、通俗的小説『冒險なる簡單主義』(一六六八)は一時期を劃せる雄篇として今も猶尊重する所たり。此書五卷より成る所の尢然たる大小説にして、首尾自叙體を用ひ、作者の閱歷を經として三十年戰爭後期の世態を描寫したり。往往にして粗糲磨かざる憾なきにあらねども、大膽に健全に赤露々たる社會を現出せしめ、而も隨處に豊富なる空想と深厚の情意とを以て讀者を恍然たらしむる筆力あり。此小説は非常の好評を以て迎へられしより、作者は之に加ふるに猶ほ一卷を以てせり。こは本來の筋とは關係なく、主人公が遠島に達して久しく獨棲する様を寫したり。是れ英のダニエル・デフォオが世界小説の名を獲たる『ロビンソン・クルウソオ』(一七一九)の先驅とも見るべし。

科學的散文は當代亦重大なる發展を遂げたり。ライプツヒの大哲學者クリ

ライプニッツ  
デルフ  
トマシウス  
マスコヴ

ステファン・ギルヘルム・フォン・ライプニッツ(一六四六——一七一六)は其元子論の主唱者にして數學者たると共に諸學家歴史家として時に或は佛語又は羅典語を以て論文を書けりといへども、他面に於ては獨逸語の改良を唱導し亦自ら之を用ひ、以て獨逸語が科學的用語として不適當なりといへる當時の迷論を喝破し、クリスティアン・ナルフ(一七五四死)はライプニッツの哲學系統を叙述して一般公衆に傳へ、ライプツヒ大學教授クリスティアン・トマシウス(一七二八死)は初めて獨逸語の文學雜誌を刊行し、ヨオハン・ヤアコブ・マスコヴは初めてライプツヒに於て『獨逸國民史』(1726 "Geschichte der Teutschen")と題し、愛國の熱誠を籠めて批評的國民史を刊行したり。

#### 第四節 和蘭文學

當代の謂ゆる「ニイデルランデ」共和國はかの大自由戦争を経て十七世紀には大飛躍を試みたり。一六四八年以來しばらく平和の温光に浴し得たると、政治思想の自由なると、有ゆる宗教有ゆる見解を包容するに憚らざる國民性と、航海商業の發展より漸く隆盛の域に入れる經濟力とは、忽ち精神的生活をして躍動

レエデライ  
ケルスカン  
メル

せしむるの好機を作れり。加ふるに和蘭は個人の最も自由を得たる所たりしを以て内外幾多の精神界の名士は此處に集り、和蘭大學殊に一五七六年の創設に係るライデン大學は此世紀に於ては歐洲學問界の中心たる觀を呈し、國法學博物學、數理學は希臘羅典語の研究と共に絶大の發達を爲せり。斯くの如き情勢の下に十六世紀の後期よりして純たる獨立的和蘭國民文學の繁榮を見るに至れり。十五六世紀の交より「ニイデルランデ」には謂ゆる「修辭家」の「俱樂部」(Rederij (Kerksamen))なるもの夥多ありき。こは文人雅客語學者美學者と相集り、かりそめに詩人戯曲の朗讀演伎を樂むを主としたる一種の社交的會合にして、西班牙領「ニイデルランデ」にては革命派の巢窟と認められ、アルバ侯の威壓の下に解散せしめられたれども、和蘭及び同盟諸州にては却て益隆盛を來し、十六世紀の末葉には和蘭の首都アムステルダムなる「愛に花さく」俱樂部は漸く重要な地位を占め、眞面目に文學を研究し述作するを以つて目的とするに至れり。蓋し宗教革命の刺戟より發し、聖アルデゴンデのフィリップ・マルニックスが新教派詩人として頌歌を作り、「オラニオン歌」等を公にして文學的効果を收め得たるが縁となり

佛蘭西文學及び希臘羅馬文學の感化を因として、斯る傾向を生じたる也。斯くして十六世紀末より十七世紀に至つてコオルンヘルト(一五二二——一五九〇)、ロイメル・ギッセル(一六一二頃の阿姆斯特ダムの一商賈)、ヘンドリック・スピイゲル(一五四九——一六一二等の詩人現はれて、從來の民謡以外新に新抒情詩を創作したり。

ホオフト

尙古文學派の祖と稱せらるゝ一人はビエテル・コルネリゾオン・ホオフト(一五八一——一六四〇頃)にして、詩人として殊に抒情詩に名を得たりしが、史家としては『ニイデルランデ史』の著あり。さまで稱せられざれども、其戯曲には古文學に倣へる『アヒルレスとポリクセナ』『テゾイスとアリアードネ』『牧人劇』『グラニダ』『史劇』『セラアルト・ヴン・エルゼン』『ベエトオ』等なり。

ファンデル

當代隨一のワ人はヨースト・ファン・デン・デル(一五八七——一七八九也。一五七八年十一月十七日ライン沿岸ケルンに生れ、後靴足商を業とせし父に従つて阿姆斯特ダムに移住し、愛に花さく俱樂部に出入したり。爾來父の業務を熱める傍幾多複雑なる閱歷を作りしが、彼が信仰は、モン・ノニイト派より加特利

教に轉じたりき。彼が比較的良作に屬する初期の作物中、悲劇的喜劇『パッサ祭』(一六一二)若くは『聯合ニイデルランデ航海の讃歌』の如きは、著しく宗教的愛國的情熱の踴躍するものありといへども、猶ほ其形式に缺點あるを免れざりき。是を以て彼は此缺陷を補はむとし、而もよく其業務を廢することなく、佛語、羅典語、希臘語を研究し、茲に尙古趣味に對する素地を作れり。斯くして初めて現れたる戯曲『エルサレムの壊頽』はファンデルの天才の完全に發揮せられしもの、同時に亦其形式著しく古文學の影響を受けかの『合唱』をさへ加へたるを見る。常に敬虔の態度を以て宗教に對せる詩人は亦全心を傾注して時代の諸問題に關與せり。殊にレモンストラント派の首領オルデンバルネエルトが死を以て共和政體の保持に努力し、幾多の野心家の爲に悲壯なる末路に會せる事實は深く詩人を動して、戯曲『パラメデス』を以て『無辜の虐殺』を痛憤しき。此材を神話に藉りたる『パラメデス』は非常の好評を博し、數日にして再版し、二三年間に三十版を重ねるに至りき。第二の傑作は『ガイヌブレヒト・ヴン・エムステル』にして、材を祖國の歴史探りて、國民的戯曲たる稱讃を博し、今も猶ほ阿姆斯特ダムに於て年々興行せ

ブレテロオ

らるゝといふ。其外『ルチフェル』、『エフタの娘』等の悲劇亦稱すべく、『マリアシチュアルト』は劇の三大一致則に精密に準據したるを以て有名也。チンデル亦抒情詩教訓詩をも作れり。然れども其劇に比すれば特に重要とするに足らず。

チンデルを先頭として尙古主義は文壇に横溢せしが、他面には亦此派があまりに古文學の形式に拘泥するを慊らすとし、形式の自由を標榜して立てる一種の『ロマンティック』派ありき。蓋し此刺戟となれるものは英國の喜劇俳優が一五九一年以來屢々此國に出入して、マアロオヅ、シエクスピア、乃至ベン・ジョンソン等を紹介したるに基けり。此派の代表者の一人は、

ゲルブランド・アドリアンゼ・ブレデロオ(一五八五——一六一八)にして、先づ戀愛詩宗教詩を以て名を知られ、一六一一年初めて悲劇『ロオドリッヒとアルフォンス』を著して尙古派に反抗せり。然れども尙ほ合唱コーラスを採用したり。其他『グリアーネ』、『無言の騎士』等あり。形式頗る自由放縱を極め、往々にして筋の統一をさへ破られむとせり。寧ろ彼が長處は小喜劇に見るを得べし。『牡牛』、『ミユルレル』、『エロリモ』等最も著名也。他の一人は、

コステル

サムエル・コステル(年代不詳)は醫師にして、愛に花さく俱樂部の一員也。悲劇『イタイイス』は殺伐慘酷讀者をして震慄せしめざれば已まざらむとしつゝ、而も滑稽の分子を挿入し來りて其効力を薄弱ならしめたり。後此詩人はチンデルに私淑して尙古趣味に傾きにき。

此他和蘭文壇に抒情詩人としてコンスタンティン・ライゲンス(ファン・ツィリヒュム)(一五九六——一六八七)あり、教訓詩人としてヤアコブ・カッツ(一五七七——一六六〇)あり。

第五節 英國文學

何れの國と雖ども、宗教革命を機として起れる國民的文學の大潮流と續いて勃興せる學者的詩歌その間に衝突なきは無かりきといへども、英國文壇に於けるが如く特殊の曲節ある活劇を演出したるは無かるべし。彼のエリザベス朝に萌芽せる宗教の紛争政治上の軋轢は十七世紀に至つて激甚となり、大陸諸國が三十年戦争の渦中に奔命せる間に、此島國には王黨と清教徒ピエウリタンとの大戦あり、奇傑クロムウルの下に清教徒一時勝利を占めて共和政府を樹立したるが、此内國

清教徒と英國文學

は深く社會を震撼せしめ英國市民を不安疑懼の間に彷徨せしめて、かの大シエクスピアを産するに至れる文藝發展の絶好根柢を壊滅し了らむとせり。然れどもかの黄金時代の情勢と英國民族の特性とは能く之が亡失を防ぎ得たるのみならず、かの國民的文學の光明主義と樂天的風尚をさへ維持するを得たり。故に清教徒が有ゆる詩歌殊に劇に對して峻烈なる壓迫を試みたるにも拘らず、依然として文藝は其風姿を損せず、學究派が枯淡なる理論を提げて制縛せむとするを顧みず、否、此學問派さへ英に於ては大陸諸國と反對に國民文學と直接に提携して、其建設發展を以て共同の目的としたり。

其一 ベン・ジョンソン一派

エリザベス朝の黄金期より大シエクスピアと並び立つて、之が反對派の首魁たりしものをベン・ベンジャミン・ジョンソン(一五七四——一六三七)とす。然れどもジョンソンは絶體的にシエクスピア劇に反對せるに非ずして、此大天才を代表者とする古英戯曲の範圍に立脚地を求め、唯幾分の學問的智識と冷靜なる理性的分子とを加へむとしたるのみ。彼がシエクスピアに捧げたる輓詩

ジョンソン

を以て見るも彼亦よく此天才の偉大を認識したりしを知るべし。彼はシエクスピアと對峙するに其批評的學才を以てせり。彼は天才的綜括力と深大なる情緒とを缺けり。是を以て彼を初として其一派の作家は皆其悲劇たると喜劇たるとを問はず偏へに舞臺上の効果を博せむとし、唯新材料を以て現象の好奇心に媚び、其弊極りては人物を寫して夸大に流れ、詩的眞理を没却するに至れり。ジョンソン謂らく、戯曲をして高尚優雅ならしむるは、唯學識の修得あるのみ、殊に古學の智識を必要とす。斯くの如くして彼派は獨り羅馬喜劇の形式を探り來りしのみならず、其性格描寫法をも之に摸せり。其結果として各人物は其個性を失ひて模型的となれり。ジョンソンの喜劇中唯一の『無言の女』を除くの外は殆んど皆内容の見るべきもの無く、亦戯曲的生命を有するもの無し。彼は比較的喜劇に長じたれども、彼は滑稽家ナウリクストと言はむよりは寧ろ諷刺家ステリケルといふに適すべし。『アルポオン』一六〇五、鍊金家、馬鹿惡魔等の稍々成功せる喜劇の外、羅馬のセネカの感化を蒙れる『セジャアナス』及『カテリナ』の二編あり。其他譬喩を主とせる假裝劇、牧人劇、教訓詩等數十種の作あり。



メッシンジャ  
ア

フィリップ・メッシンジャ(一五八四——一六三九)はシェクスピア以後の英詩人中最も想像力に富める新清の作物を出せる人也。其喜劇中『貴婦人としての町女房』、『古債償却の新法』等は其師ジョンソンに倣へるものにして、悲劇『ミラン侯』、『不自然の争闘』、『不祥の持参』等蓋し彼が作中の白眉とすべし。

フォード

ジョン・フォード(一五八六——一六四〇)は法學者也。其悲劇並びに喜劇は著しく舞臺に成功したるが、其原因は主として其肉感的情熱を帯ぶると甚しかりしに在り。而して此情熱はかの清教徒の極力劇と作者とを攻撃し撲滅せむとせし主因なりし也。其喜劇に於ては『情人の愛戀』、悲劇にては『エドモントンの魔女』、『ジオヴニとアンナベルラ』等最もよく彼が特色を推揮せるもの也。

劇の衰頹

清教徒の排劇運動は英國戯曲の進展に多大の影響を及ぼしたり。惟ふに劇の全盛時代よりして劇場に對する非難の聲ありき。熱心なる宗教信者は常に俳優の放縱を嘆き其の増加を憂ひて、力めて之が撲滅策を講じたりしが、幸に王侯殊にエリザヘス女王、ライセスタア、ツーキック、デアビイの諸侯は各自廷に俳優を養へりしを以て、其保護の下に反對者の鋭鋒を避くるを得たり。然れども爾

來俳優が宗教乃至政治上の事件に關して反對の意見を吐露せしを以て幾度か演技禁止の厄に逢へり。一六〇六年には舞臺に於て神、基督、聖靈の名を用ふることを禁せられ、九年の後にはロンドンに第二の劇場建設せむとせしを市長は之を中止せしめき。ジェームス王の寵幸によりて一時劇場は小安を得たれども、劇は最早曩日の獨立自由を失ひて、一部の作者と優人とは清教徒に屈服して宗教劇を演ずるに至れり。佛蘭西俳優の一群ロンドンに來り、ブラックフライヤア座に開演するや、清教徒は女優の登場を見て風致に害ありとし、法學者キルリアム・ブラインを急先鋒として猛烈に排劇運動を開始したりしが、一六四二年に至つては國會は演劇禁止の議決を爲し、超えて四十八年には更に嚴重なる法律を發布し、俳優となれるものは箠杖の刑に處し、觀客に對しては、五シリングの罰金を課せり。斯くの如くして清教徒は勝利を占め英國文明の美果をして散亂せしめ了れり。尋いで一六四九年チャアレス王の斬首せらるゝと共に、英國史は茲に一新時期を劃したり。

其二 ミルトン及び清教徒派詩人

ミルトン

此新時代の文學を代表せるものをジョン・ミルトン(一六〇八——一六七四)とす。ミルトンは政界の英傑クロムエルと並立つて十七世紀英國詩人の最も大なるもの也。一六〇八年十二月九日一官吏の子としてロンドンに生れ、周密なる教養の下に人となり、ケンブリッジに學生となる。其講學中深く古文學の研鑽に志し得る所尠からず。已に此時代より詩作を試みたるが、當時の作『アルカデス』、『オムス』の二劇は正に其學修せる古文學に則れるものなり。一六三七年巴里に往き、轉じて以太利亞に旅行し、ガリライの如き知名の士と交り、深く以太利亞文學を玩味せり。歸來恰も酣なりし内亂の渦中に身を投じ、共和黨インディペンデントの一人として、熱心に革命運動に努力し、椽大の筆を揮つて政論を試みたり。共和黨は其功を多とし、共和政府の組織なるや彼を援いて樞密院の秘書官に任せり。かくして亦猶ほ政論に筆を執りしが、特に有名なるものは『英國民の辯疏』(“Defensio pro populo Anglicano”)と題せる一編にして、ミルトンは之を以て暴君を罰するは國民の權利なりと稱し、チャールズ王を斬罪に處せる理由を辯せり。王政復古するや、此等の政論的述作は吏の爲に燒却せられ、身も亦囹圄の人と成りしが、ミル

トンの才を愛せる貴族の斡旋を以て國會は漸く彼を放免せり。後王黨は彼を誘うて味方たらしめむとし、曩日の秘書官に推薦せしむとたれども、ミルトンは斷乎として之れを拒絶し、安んじて貧苦の境に身を置けり。已に秘書官時代に着手せし雄篇『失樂園』を唯一の慰籍とし、心靜かに之が稿を繼ぎ、一六六七年を以て公刊したり。然れども此雄渾崇高なる傑作は其眞價時代の人の認むる所とならざりき。蓋し復古時代の文學の特色たりし淫逸猥雜の風は、到底此崇嚴高潔の調を容るゝに由なかりし也。

「失樂園」

ミルトンは天才なりき。『失樂園』は渾圓たる一大美術品也。ミルトンはかの散漫にして矛盾多き抽象的材料を捉へ來りて少くとも一部分は能く統一整成し、神の惡魔に於ける關係の如き乃至罪の洪水「アダム、イイズ」の樂園放逐に關する神秘の如き、清教統が幻想を轉じて之に詩的生命と形態とを與へたる、確に創作的天才が純たる創作たるを證するもの也。就中、ミルトンの成功せるは其前半也。有ゆる神學的智識と希伯來羅典の學才とを以て按排しつゝ、而も術學の弊に座せず、之を美術的に運用して詩の肉と血とを與へたるの大手腕に至つて

は、定に駭目に値す。後半には獨斷的思考を抽象的に注入し來りて、詩としての血肉を没却し、或は朦朧不明の空想錯綜して讀者をして霧裡に彷徨せしめ、詩情を感ずるに由なからしむ。是れ蓋し當代の好尚たる術學派乃至マリニ一派の華麗主義に感染せしものなり。ミルトンが抒情詩的戯曲『サムソン・アゴニス』は此寧ろ弱點とすべき學者風の代表作なり。又『再び獲たる樂園』の一編あり。然れども『失樂園』に獲たる不朽の名をむしろ此『再び獲たる樂園』に失せるが如き觀あるを憾とす。

パンヤン

ミルトンに尋いで傑出せる清教徒詩人はジョン・パンヤン(一六二八—一六八八)也。補鑊匠の子にして敬虔なる清教徒たり。豊麗なる譬喩小説『天路歷程』の一篇を以て宗教的世界詩人の列に入れり。此他五六の作あれども、『神聖戦争』最も看るべし。

ハルリントン

同代散文界にはジェムス・ハルリントン(一六一一—一六七七)あり。パンヤンと並び立てる一才人にして、其作『オセアナの共産政治』といふ一編は理想的社會を空想せる政治小説として最も有名なるもの也。

### 其三 王政復古期の英文學

共和政府も一瞬時に倒れ、王政復古してスチュアート家のチャアルス二世王位に即き(一六六〇)英國史は再び局面を新にすると同時に英國文學にも亦新傾向を生じたり。王政復古期の一般社會は共和時代の極端なる潔白主義に反して極端なる淫靡の風に染めり。上はチャアルス二世以後ジェムス二世ウヰリアム王の宮廷よりして華奢淫逸となり、昔日の典雅優美は影を隠して、猥雜粗漫は到處に跋扈し、宮女は公娼と擇ぶなく、王侯争つて良家の婦女を辱かしめ、甚しきに至つては貴族の間に『舞踏者』と稱する一團起り、日夜相集りて言ふに忍びざる行を爲して憚らざりきといふ。かゝる間に詩歌も亦墮落し、漸く民俗的精神を遠りて貴族に媚び、自國文學の長所をすて、佛蘭西文學を摸倣し、形式主義と術學の風と勝利を博して、亦内容の如何を問はず、唯時代の病弊を反映せしめて以て恣然たり。殊に世相を眼前に描寫する劇に於て最も其甚しきを見る。其墮落の甚しきに從ひ愈公衆の歡迎する所となり、殊に放逸なる貴族の熱心なる保護を受けたり。一旅店の子にして多才の劇才ありしウヰリアム・デニヰナントは佛

ドライデン

國式を摸して舞臺の裝飾を改良し、亦女優を登場せしめて女形を演せしめたり。此新尙古派の首領をジョン・ドライデン(一六三一—一七〇〇)とす。當代一流の劇才にして殊に形式的技巧に手腕を有したれども、毫も詩人としての情熱あるなく、個人としては品性頗る陋劣なりき。曩にはクロムエルに阿諛し、今亦チャアルス二世を讚美して其桂冠詩人たり。彼が抒情詩、叙事詩方面に於ては、一六六六年のロンドンに於ける疫病火災を寫せる『不思議の年』(“Annus mirabilis”)英國自由派のホキック黨に對して王室擁護の爲に執筆せる『アン・サロンとアキト・オフ・エル』其改宗して入れる羅馬教會の爲にせる『牝鹿と虎』等及び『譬喩詩』幾編あり。彼亦『劇詩』の一文を以て一種の作劇法を論じ、佛蘭西の嚴格なる繩墨主義を主張して、シエクスピアを難じたり。爾來殆んど一世紀の間シエクスピアは劇壇を逐放せられ、ドライデン一派の繩墨主義の跳梁するを見る。ドライデン自作の劇亦數十篇あり。然れども到底藝術的作品として何等の價值あるなし。彼が自説を體現せるものに、『大モオガル』あり、然れども徒らに冗長散漫たるのみ。むしろ喜劇『西班牙僧』を其良作とすべし。其他其自説の根據とせる佛蘭西悲劇

とシエクスピアのロマンティック劇との融化を試み、自ら稱して『勇士悲劇』といへる初期の作『印度皇帝』『秘密の戀』——一名——『處女王』、『グラナダの征服』、『佛蘭西無押韻劇に倣へる』、『ヤツレングゼエゾ』、『オイディパス』、『ガイス侯』、『ドン・セバステヤン』等あり。

ドライデンはシエクスピアを以て其の代表者とせる從來の國民劇と新佛蘭西文學の好尚となれる形式主義との間に絶えず彷徨しつゝ、次第に後者を重しとせる傾向を生じたるが、之に反して新佛蘭西劇を排し、力めて國民的藝術の形式を重んじたる二三の劇詩人あり。ニコラス・ノオヅ(一六七三—一七一八)、トオマス・オットズイ(一六五一—一六八五)等是なり。就中オットズイは其優なるもの也。初め俳優となりしが不成功に終り、轉じて作家となりしが、比較的時代の趣味と相背き、力めて淫風を避け、又其描く所多く平民的たりしを以て、遂に十分に世の容るゝ所とならず、始終不幸を以て一生を終れり。悲劇『ドン・カルロス』は獨逸のシルレルと同材異工、亦特殊の趣味を有し、喜劇『流行の交際』と共に多少の好評ありき。『孤兒』——不幸の婚姻』は平民感動劇として、早く近世文學の一

オットズイ

傾向たる感情主義センチメンタリズムの隠見するあるを見る。然れども其傑作は「救はれたるゴニス」(二六八五)とす。全局の総合的効果に於ては多少の遺憾なきに非れども、個々の幕に於ける筆力極めて非凡、將來の發展豫期するに足るべき跡を残して夭折せり。

パトウア

諷刺詩人乃至喜劇作家として一時ドライデンに凌駕せるもの二三あり。

就中諷刺を以て第一流の地位を占めたるをサミュエル・バトラー(一六一二—一六八〇)とす。ゾオセスタアシャイヤアのストレンスハムの人、ケンブリッジ大學に教育を受け、チャアレス二世の寵幸を蒙れり。其喜劇的叙事詩「ハッディンラス」(二六六三—一六七九)ロンドン出版は「ドン・キホオテ」を模倣とせるもの、騎士ハッディンラスと其従者ジールンと種々の冒險を企つること猶ほドン・キホオテと其僕パンサの遍歴に於けるが如し。然れども内容に於ては「ドン・キホオテ」と全然異り、此編の主人公は偽善と諂諛との化身にして、主従世の有ゆる罪惡を滅ぼさむと稱しつゝ、忽ち其馬脚踏はれて到る處に排撃せらる。この結構はやがて、共和政府の下に勢力を振へる清教徒を諷刺せむとせるもの、當時の放逸淫猥なる社

會相を反映し悉して餘蘊なしといへども、其の極往々嘔吐を催せしめむとする憾あり。

井ウナアレイ

喜劇に至つては更に弊風の甚しきあり。其の作家中有名なるものはウキリアム・キッチャアレイ(二六四〇—一七一五)にして其處女作「林中の戀」(二六七二)は非常の喝采を以て迎へられ、爾來一作毎に聲名日々に揚れり。彼亦結構對話の巧妙なる點に於て、又性格描寫に一種の力ありし點に於て、確に有数の劇才なれども、時代の惡趣味に反する能はず、大作を出さずして止めり。彼の作中殊に有名なるものを「田舎女房」の一編とす。——舞臺の成功に於て彼に優れるものはウキリアム・コングレエツ(一六七〇—一七二八)也。其處女作「昔の若者」以下「偽善者」(『The Double Dealer』)「戀の戀」等は其最も好評ありしもの也。結構敢へて巧とは言ふべからざれども、其滑稽の機才と人物活寫の氣と亦棄てがたきものあり。彼に唯一の悲劇あり、「哀れなる花嫁」といふ。其他二三の假裝劇、歌劇等あれど稱するに足らず。——此他猶ほジョオデ・ンファクハア(一六七八—一七〇七)、ジョン・ワンプリッヂ(二六七二—一七二七)、トオマス・シッポエドエル、ジョオデ・エゼレエデ、

コングレエツ

及び開秀作家にはアンソラ・ペエン等あり。

猶ほ抒情詩界はドライデンを先輩として教訓詩と諷刺詩との流行ありしのみ、卒直高調の情詩の見るべきもの殆んど無く、亦傑出せる詩人も無かりき。トオマス・ダフ・イ、チャアレス・セトレイの如き、唯一般の風潮に漂へるのみ。

其四 王政復古期の散文界概観

王政復古時代の散文界は之を韻文界に比較すれば頗る真面目なる態度を維持したり。殊に歴史文學及哲學的方面に於て然りと爲す。

クラレンドン

エドソアド・ハイドクラレンドン卿(一六〇八—一六七四)はチャアレス二世朝の大宰相として、一たび共和黨に追放せられし頃より歸りて再び廟堂に立てる間に紀念録風の『反逆史』を著したり。往々冗長に流れたる節なきに非ざれども、大體に於て雄勁の筆たるを失はず。クラレンドン卿一派の王黨に反對し、『ホッグ』の一員として、自由主義を保持せる史家に、ギルバート・バアネット(一六四五—一七一五)あり。エディンバラの産にして、グラスゴウ大學教授たり。『革命史』、『現代史』の二大篇なり。就中後者最も有名にして、後のボオブ、スキフト等は之を其

諷刺嘲笑の一題目としたりき。其他哲學者にはジョン・ロック(一六三六—一七〇四)出で、經驗哲學の始祖となり、トオマス・ホブズ(一五八八—一六七九)亦哲學的述作あり。科學界にはアイザック・ニュートン(一六四三—一七二七)出で、自然科學の根柢に偉大なる貢獻を爲せり。ロックとニュートンとは共に十七世紀に生れたれども、其思想は寧ろ十八世紀に至つて甚深の影響を及ぼしたるもの、吾人は後項に於て彼等を詳説するの好機あらむを信じて、茲には之を省略す。

其五 英國々民文學の末期

十七世紀の末期に於てかの學者文學の勢力漸く瀰蔓し來り、佛蘭西に根據を置きて各國文學を擧げて其奴隷とせむとするや、英國亦其影響を蒙り、遂に從來の國民文學は全く勢力を失ひ了らむとす。此時最後の戦士として國民文學の爲に氣焔を吐けるものをナアザン・レイ(一六五七—一六九三)とす。其戯曲『セオドシアス』、『グロリアナ』、『シイザア・ボルジア』、『クレエヅの王女』は其形式乃至韻律に於ては流石に時代の惡趣味を脱する能はざりきといへども、筆力雄健にして内容亦豊麗、メッシンヂア以來稀に見るの作なり。

レイ



ヘシオドス Hesiodos ..... 104	ドレンデン Dryden ..... 111	ラッセル Russell ..... 130
ヘラヤ(ハヤ) Heywood, John ..... 104	ドレンデン D'Orleans, Carl ... 131	ラッセル Rudolf von Ems... 131
ヘラヤ(ハヤ) Heywood, Thomas ..... 114	チンチオ Cintio, Giovanni Gibaldi ..... 114	カ(カト)
ヘロドトス Herodotos..... 120	チャナセフ Chansee, Geoffrey. 120	カキオポロ Eunolopos..... 121
ヘロドトス Herodorian ..... 124	チナディ Tschudi, Aegidius. 124	カキオポロ Odyssee (Odysseus) 121
ヘレスニク Heresianax 124	チャムベレン Chamberlyne, William ..... 124	カキオポロ Euripides..... 121
ベムボ Bembo..... 124	リヒアノス Rhianos ..... 124	カキオポロ Eubulos..... 121
ベニ Berni, Francesco... 124	リヒアノス Lykophron ..... 124	カキオポロ Ovidius..... 121
ベレイ Bellay, Joachim du 124	リヒアノス Lykophron ..... 124	カキオポロ Ovidius..... 121
ベコン Bacon, Francis ..... 124	リヒアノス Lichtenstein, Ulrich von ..... 124	カキオポロ Ovidius..... 121
ペラヤ Petrarca, Francesco 124	リヒアノス Lily, John ..... 124	カキオポロ Ovidius..... 121
ペレス Perez, Andrea..... 124	リヒアノス Rimucini, Ottavio. 124	カキオポロ Ovidius..... 121
トレンキス Trenkides, Dolce Lodovico ... 121	ルキオス Lukios (v. Patri) ... 124	カキオポロ Ovidius..... 121
トレンキス Trissino, Giorgio... 124	ルキオス Lukianos ..... 124	カキオポロ Ovidius..... 121
ドレンケン Drayton, Michael 104	ルケラ Rucelari, Giovanni. 124	カキオポロ Ovidius..... 121

ワイヤル Wyat, Thomas... 104	コルネリウス Cornelius ..... 124	ソクラテス Sokrates ..... 121
ヴァルミキ Valmiki ..... 124	タッソ Tasso, Bernardo ..... 124	シザル Cisar, Julius..... 121
ワイゼ Weise, Christian ... 124	タッソ Tasso, Torquato ..... 124	シザル Cicero, Marcus
バロク Barock (Varnak) Valois, Margarethe de... 120	トラスソ Trassoni, Alessandro ..... 124	ツルリウス Tullius ..... 124
カリダサ Kalidasa ..... 124	デイヴィッド David ..... 110	ネヴィウス Nevius ..... 120
カリリノス Kallinos ..... 124	ダエ Daie, Alighieri (Alighieri) ..... 124	ナハルロ Nalarro, Torres... 100
カリリノス Kallimachos... 124	ダンバー Dunbar, William... 124	ネイダール Neidhart von Reuenthal..... 124
カスティリョ Castiglione Baldassare ..... 124	ダッシュ Dach, Simon..... 124	ランニヤナ Rannyan ..... 10
カナルロン Calderon de la Barca, Pedro ..... 124	レスケス Lesches v. Lesbos ..... 124	ラベライ Rabelais, Francois. 121
カノニス Canoens, Luis de... 120	レスケス Lesbos (Lesbos) 124	ラレイ Raleigh, Walter. 104
カノニス Canoens, Luis de... 120	レスケス Lesbos (Lesbos) 124	ラレイ Leibnitz, Christian
カノニス Canoens, Luis de... 120	レスケス Lesbos (Lesbos) 124	ラレイ Wilhelm von ..... 124
カノニス Canoens, Luis de... 120	レスケス Lesbos (Lesbos) 124	ラレイ Musius ..... 121
カノニス Canoens, Luis de... 120	レスケス Lesbos (Lesbos) 124	ラレイ Murner, Thomas... 124
カノニス Canoens, Luis de... 120	レスケス Lesbos (Lesbos) 124	ラレイ Tacitus, Publius





テオクリオス Theokritos ..... 108	アレクシス Alexis ..... 112	アラコン Alarcon, Juan ..... 113
テソピス Thespis ..... 108	アンティパネス Antiphanes ..... 112	Ruiz de ..... 113
テレンティウス Terentius, Publius ..... 111	アリストテレス Aristoteles ..... 112	アブラハム Abraham a Sancta Clara ..... 113
ティブッリウス Tibullus, Albius ..... 111	アポロニオス Apollonius ..... 112	サムエル Samuel ..... 114
テルランティウス Terullianus, Demokritos ..... 111	アリストテレス Aristides ..... 112	サッポロ Sappho ..... 114
デモステネス Demosthenes ..... 111	アテウス Ateus ..... 112	サンマザロ Sanmazzaro, Jacopo ..... 114
デスカリテス Descartes ..... 112	アンドロニコス Andronikus ..... 112	サルスティウス Salsustius, Orispus ..... 114
デッカー Dekker, Thomas ..... 112	アッピウス Appianus ..... 112	サックビル Sackville ..... 114
アルキオス Alkaios ..... 112	アッリアヌス Arrianus ..... 112	サウソウェル Southwell, Robert ..... 114
アルクreon ..... 112	アプデュス Apulejus, Lucius ..... 112	ザクス Sachs, Hans ..... 114
アルマン Alkman ..... 112	アウグスティヌス Augustinus, St. ..... 112	キヤム Kyd, Thomas ..... 114
アリオン Arion ..... 112	アウレリウス Aurelius, Sextus, Propertius ..... 112	グイニッコ Guinicello ..... 114
アナクシマンダー Anaximander ..... 112	アブハラ Abulala ..... 112	グイッチャーニ Guicciardini ..... 114
アナクシメネス Anaximenes ..... 112	アリエント Arienti, Sabadino ..... 112	フランセスコ Francesco ..... 114
アリストファネス Aristophanes, des ..... 112	アリストフ Arostof, Ludovico ..... 112	ギヤンヌ Guillaune de Saint-Didier ..... 114
	アルマニ Mannami, Luigi ..... 112	
	アレチノ Arehino, Pietro ..... 112	
	アグリコラ Agricola, Johannes ..... 112	
	アレンマン Aleman, Mateo ..... 112	

ジュベナリス Juvenalis, Junius ..... 109	(Amorgos) ..... 112	モリス Morus, Thomas ..... 110
ユダール Udaal, Nicolas ..... 109	ストリッカー Stricker ..... 112	モリナ Molina, Tirso da ..... 110
メウング Meung, Jean de ..... 112	スペラトゥス Speratus, Paulus ..... 112	モンタラン Montalvan, Juan ..... 110
メディチ Medici, Lorenzo ..... 112	シドニー Sidney, Philipp ..... 112	ペレス Perez de ..... 110
メランクトン Melancthon, Philipp ..... 112	シェイクスピア Shakespeare, William ..... 111	モレト Moreto, Agustin ..... 110
メンدوز Mendozn, Hurtsdo de ..... 112	ジョインヴィル Joinville, Jean de ..... 112	セネカ Seneca, Annianus ..... 110
メッシング Messinger, Philipp ..... 112	キングス James (King) ..... 112	セネカ (羅馬詩人) Seneca, der Trogde ..... 110
ミヌルミヌス Minnermus ..... 112	ジョンソン Johnson, Ben (Benjamin) ..... 112	センプロン Sempron, Hieronimo ..... 110
ミケル Michael ..... 112	ヒョブ Hiob ..... 112	セルヴァンテス Cervantes, de Saavedra Miguel ..... 110
ミランダ Miranda, Sa de ..... 110	ヒッポナックス Hipponax ..... 112	シラスティナス Siasinus ..... 111
ミルトン Milton, John ..... 112	ビオン Bion ..... 112	ステスィクロス Stesichoros ..... 111
シモンイデス Simonides (Tinos) ..... 112	ピNDAR Pindar ..... 111	スペンサー Spencer, Edmund ..... 110
シモンイデス Simonides ..... 112	ピタゴラス Pythagoras ..... 111	スズモンオウィチ Szymonowicz ..... 111
	モゼス Moses ..... 112	スペロニ Speroni ..... 110
	モハムマド Mohammed ..... 112	スピギエル Spiguel, Henrik ..... 110
	モンタニグ Montaigne, Michel ..... 112	

對照名人索引終

明治四十年一月七日印刷  
明治四十年一月十日發行

世界文學史復刊號  
定價全四拾錢

著者 橋本忠夫

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋新太郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者 吉見繁藏

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所



發兌元

東京市日本橋區  
本町三丁目

博文館





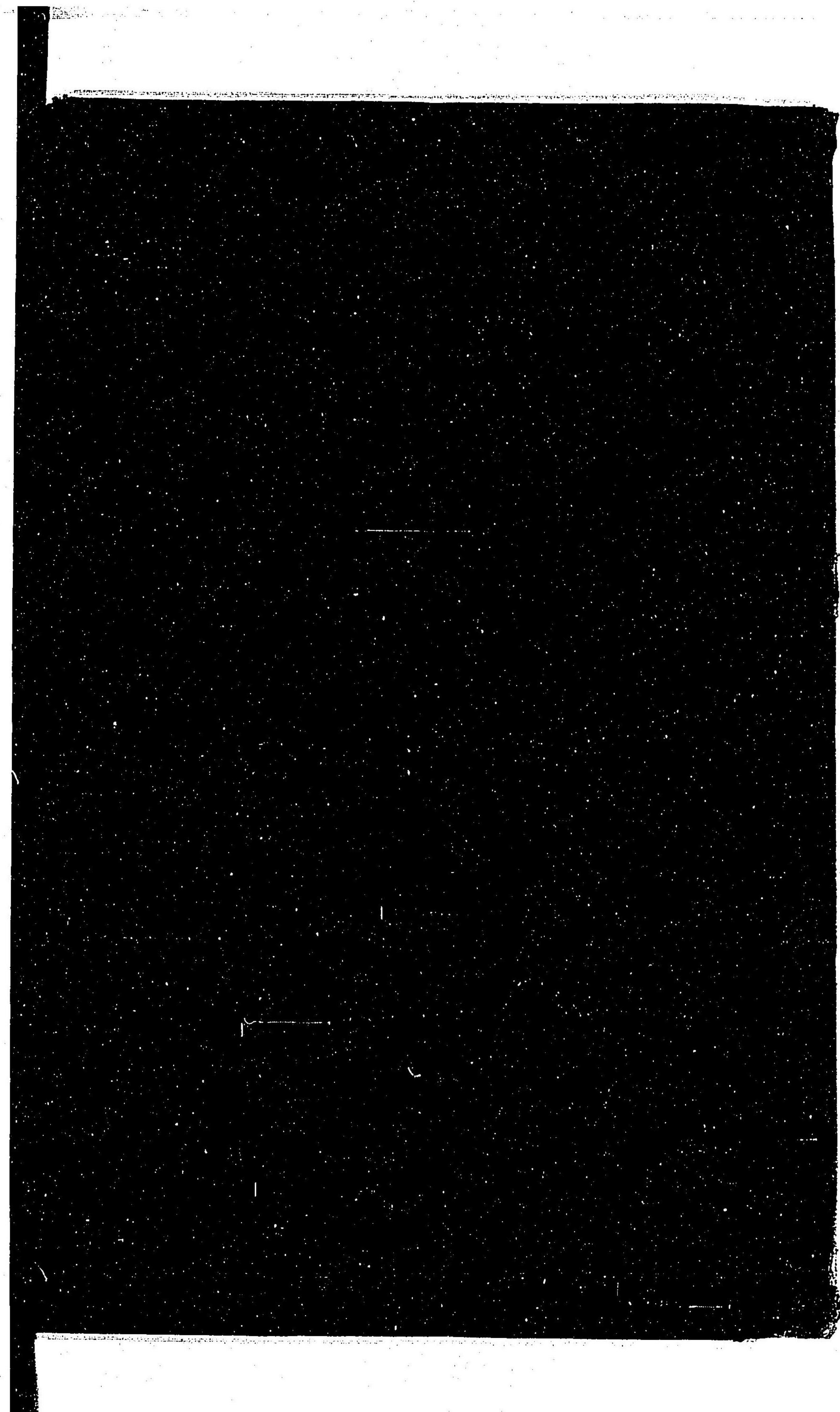




78

3





78

3

084765-000-9

78-3

世界文学史

橋本 忠夫 / 著

M40

DBA-0110



